

# 『日本におけるサミュエル・ジョンソン およびジェイムズ・ボズウェル文献目録 (1871-2005)』 補遺

(2010年9月現在)

藤 井 哲

本稿は、筆者が2006年に上梓した『日本におけるサミュエル・ジョンソンおよびジェイムズ・ボズウェル文献目録』(ナダ出版センター)に対して、2010年9月末までに得られた情報を追加し、それまでに判明した誤記を訂正するために執筆された。

2009年がSamuel Johnson (1709-1784)生誕300年であった。しかしあいにくなことに、英語関係者のために情報伝達役を担っていた『英語青年』が2009年4月から休刊になってしまったせいか、日本では300周年を記念しようとの機運が盛り上がり上がらなかったようである。それでもJohnsonやJames Boswell (1740-1795)研究者たちからは300年目を意識しての成果が多少見られたので、それらを日本における2009年の成果として記録しておくことを主たる目的として、この「補遺」を活字化することにした。

表記上の方針については、上述の『文献目録』に添えた「凡例」(pp. vii-xi)に沿っているが、要点だけを以下に略述しておく。

執筆者または翻訳者が日本人名であることを目安に採録したが、海外で発表された日本人名による文献や、日本で発表された外国人名による文献も排除しなかった。

各項冒頭の【文献番号】では、3桁目までは文献が発表された西暦年の下3桁を、4桁目は発行月(1～9, X=10月, Y=11月, Z=12月, &=不明)を表し、5桁目には同じ月に発表された文献を識別するための記号(1～9, a, b, c…)が振られている。

各項目へのコメントに添えられることがある【主題識別番号】の内訳については、本稿末尾の「主題別索引」に箇条書きしている。

煩雑さを避けるために, *Dictionary*, JB, *Journey*, *Life*, *Shakespeare*, SJ, *Vanity* といった略式表記を用いている. 必要に応じて「凡例」を参照されたい.

執筆者名に対して敬称を略させて頂いている.

この「補遺」は筆者が存在を知り得た文献(\*付は未見の場合)を記述しているに過ぎず, 網羅的であることは意図されていない. なお「参照資料目録」は省略した.



【87171】に追加:

【参考】: 榊原貴教「スマイルズの翻訳社会史:『西国立志編について』」 & 「日本におけるスマイルズ像」 & 「スマイルズ翻訳作品目録」『翻訳と歴史:文学・社会・書誌』第43号 ナダ出版センター 2009年3月 pp. 1-14.

【89081】 無署名[坪内逍遙]「をかし」『讀賣新聞』 1890年8月18日~ 9月9日. 8月24日第6面掲載の「第二十 <sup>ごべう</sup> 誤謬」(選集ではpp. 77-78)は*Dictionary*での'Curmudgeon'が後世に招いた珍談. 同29日第5面の「第三十 <sup>リテラリー・クラブ</sup> 文學會」(pp. 87-88)ではGarrickによる滑稽なGoldsmith評. 9月5日第5面の「第四十一 <sup>じんしゃく</sup> 人爵」(pp. 98-99)によると, Peter Rubens (1577-1640) ほどの画家には称号なぞ不要とSJが一喝した由. 【再録】: \*『逍遙選集第八巻』春陽堂 1926年10月 および第一書房 1977年8月 pp. 65-103.

【891Y3】に追加:

執筆者を坪内逍遙とする. 【再録】: \*『逍遙選集別冊第三』春陽堂 1927年11月 および 第一書房 1977年11月 pp. 683-688.

【89443】 風帯子[内田魯庵]『文學者となる法』 右文社 1894年4月 《扉+口絵+8+186頁》. SJへの簡単な言及がある箇所と話題は, pp. 33 (世話焼), 113-114 (慈善の人), 127 ( “their fondness without benevolence, their familiarity without friendship” ), 128 (談笑せる者), 130 (文學會), 165 (新聞に載りしものを更に出版), 168 (トンソンが製造せし詩人), 174-175 (書肆より救はれたり), 176-177 (人気の前に叩頭禮拜する作家の本文)である. 【復刻】:『名



著復刻全集:近代文学館:文学者となる法』ほるぷ 1972年1月。【再録】:[98642] pp. 175-299.『明治の文学 第11巻:内田魯庵』筑摩書房 2001年3月 pp. 109-254.

【90092】 柳村[上田敏]「英辭書の古今」『帝國文学』帝國文學會編輯 第六巻第九(第六十九) 大日本圖書 1900年9月 pp. 51(967)-59(975). J. A. H. Murrayの新著*The Evolution of English Lexicography* (OUP, 1900)の概要を述べながら, SJの*Dictionary*の個性的特徴にも触れる。【17/】【復刻】:『帝國文学』日本図書センター 1980年。【再録】:『定本上田敏全集第三巻』教育出版センター 1978; 1981; 1985 pp. 538-544.

【90121】 上田敏「ジョンソン, チェスタアフィイルド卿を訪ふ」『明星』東京新詩社 第11號 1901年2月23日 p. 81. Edward Matthew Ward (1816-1879)が現場を再現させた絵を解説した短文。【17/】【復刻】:『明星:第一次』京都:臨川書店 1964年9月。【再録】:『定本上田敏全集第九巻』教育出版センター 1979; 1981; 1985 p. 383. 絵画は転載されていない。【参考】: Roger Ingpen ed., *The Life of Samuel Johnson by James Boswell* (1925), vol. I, facing p. 152. 絵画が掲載されている。

【90561】に追加:

【再録】:『定本上田敏全集第九巻』教育出版センター 1979; 1981; 1985 pp. 321-324.

【90653】 Kakuzo OKAKURA[岡倉覚三]. *The Book of Tea*. London: 1906.

第I章の末尾近くに“Samuel Johnson draws his own portrait as ‘a hardened and shameless tea-drinker, who for twenty years diluted his meals with only the infusion of the fascinating plant; who with tea amused the evening, with tea solaced the midnight, and with tea welcomed the morning.’”の一節が見られるが, 本書でのSJへの言及はこの箇所のみ。創元社の全集第2巻(1945年12月)で参照した(p. 147)。【参考】: 村岡博(譯)『茶の本』岩波文庫 1929年3月。

【11/10】

【90931】の4行目に追加：

…言及している (pp. 58-59, 117, 122-125, 129-131, 227-230, 岩波書店の1995年版『漱石全集』では pp. 59-60, 102, 105-106, 107-108, 110-112, 184-186).

【91341】を下記と差し換え：

大日本国民英語學會(編纂) *Biographical Stories by Nathaniel Hawthorne*. 英語研究社 1913年4月(Pocket Readers 11) 《原文119 + 訳注74頁》. 1842年の標記の書ちゅうの"Samuel Johnson"は, Chapter IV-V (pp. 49-70)および訳註之部(pp. 30-44)に見られる. 1914年6月の第三版で記述した. 【9/】

【92121】 鈴木三重吉 「老博士」 『赤い鳥』 赤い鳥社 第6巻2号 1921年2月 pp. 68-77. 我が国にも関連文献が40件ほどあるNathaniel Hawthorne 著*Biographical Stories* (1842)から"Samuel Johnson"を材料に鈴木がほぼそのままに再話した文章. Uttoxeterの市場に佇むSJの姿が表紙に色刷りされている. しかしHawthorneに拠ったことも, SJの逸話であることも言及されていない. 榊原貴教氏(ナダ出版センター)より提供の情報. 【9/】 【復刻】: 日本近代文学館 1979年2月. 『CD-ROM版赤い鳥』 大空社 2008年 (ISBN:978-4-283-00546-4).

【926X1】 ジョン・マーシー/内山賢次(譯) 『世界文學物語』 アルス 1926年10月 《XI+667頁》. SJに関わる言及が見られるのは, Juvenalis模倣詩(p. 163), 作品よりも生涯が面白いSJ (p. 240), 反形而派としてのSJ (pp. 320 & 352). また英18世紀散文を語った第32章(pp. 249-263)には, 文章の模範としてSJが*Spectator*を薦めた話や, 「何の重要な藝術的作品をも残さない唯一の重要な文学者」との評がある, 次章の冒頭に"Pope"からの引用(p. 364)もあり, 下ってGoldsmithへの墓碑銘(p. 489)も言及されている. 【原著】: John Albert Macy, *The Story of the World's Literature*(1925). 【10/5】 【再刊】: ジョン・メイシー 『世界文學五十講』 第一書房 1940年8月 pp. 130, 184, 242, 261-271, 272, 352. 【参考: 957Z2】

【92881】 福原麟太郎 「書廊」 『亡羊』 洋々塾 第2巻8號 1928年8月 pp. 15-16. 神保町で*Johnson's English Dictionary as Improved by Todd and Abridged by Chalmers; with Walker's Pronouncing Dictionary...*(1846)を見つ

けた話が出てくる。 【17/】

【928Y2】 ロバート・リンド/札木新一(訳) 「ジョンソンとその周囲」 『研究社月報』 第65号 研究社 1928年11月 pp. 5-6. Robert Lyndによる*Dr Johnson and Company* (1927)を拾い読みして、SJが読者の興味を惹くのは、巧みな編集で読者を面白がらせるJBの*Life*の主題としてであったと紹介する。 【5/3】

【92911】 ウィルヤム・アルフレッド・プレイフェア(述)/福原麟太郎(譯) 「英文學小論(四)」 『亡羊』 羊々塾 第3巻1号 1929年1月 pp. 28-30. 第四章「ジョンソンとギボン」の第一節「サミュエル・ジョンソン」(pp. 28-29)が、文壇に君臨したSJですら批評に際して時代の影響を免れておらず、ソネットに新しい精神を注ぎ込んだMiltonの "On the Late Massacre in Piemont" を理解できなかったと指摘する。William Alfred Playfairは東京高等師範学校の教授。 【10/1】

【929X3】 菅原夢洲 「ボズウェル二つの面」 『研究社月報』 第77号 研究社 1929年10月 pp. 1 & 5. 女漁りで滑稽を演じた自伝作家の側面に較べて、SJ伝に向かう伝記作家の側面においてJBは力量を発揮し得たと評す。 【4/3】

【93081】 O・S・M 「書架漫語：ジェイムズ・ボズウェル」 『研究社月報』 第86号 研究社 1930年8月 p. 3. 読書にあっては感興を催すタイミングこそが大切だとした、SJの学問に対する姿勢を*Life*に読む。 【1/3】

【930X2】 上田敏 「英文學概論(一)」, 「英文學概論:續」, "Notes on the History of English Literature" 『上田敏全集第七巻』 改造社 1930年10月 pp. 3-189 & 191-414 & 英文1-236. 1912~14年の講義録と英文の講義用メモであるが、SJの伝記と文業についての要点を連ねたpp. 404-405は受講生の筆記に拠る。また p. 193 ではSJをSteeleの随筆を継ぐ存在と評している。しかし教育出版センターから1981年に刊行(1985年再版)された『定本上田敏全集第八巻』において、編者である矢野峰人が学生時代に筆記した1915~16年の講義録「英文學通史」および「十八世紀後期の英文學」と差し替えられており、そこではSJがRomanticismへの流れを抑える存在として以外にはほとんど言及されていない。

【93111】 に追加：

【参考】：「英文學叢書配本御通知」 『研究社月報』 第91號 研究社 1931年1月 p. 7. 本書では「最も信頼すべき古版書」を用い、註釈と解説は「久しい御研究の収穫」である由.

【93142】 黒部五郎 「新発見のボズウェル稿」 『研究社月報』 第94號 研究社 1931年4月 p. 3. *Catalogue of an Exhibition of the Private Papers of James Boswell from Malahide Castle. Held at the Grolier Club, New York, December 18, 1930, to February 7, 1931* に掲載された584件の概要や主要文書についての紹介文. 【4/3】

【93311】の下から3行目に追加：

【書評】：【93351】 【再録】：『研究社月報』 第112號 研究社 1933年1月 pp. 1-2. 序文のみ.

【93351】 齋藤勇 「ブック・レヴェ：石田憲次氏新著「ジョンソン博士とその群」」 (書評) 『大阪朝日新聞』 1933年5月28日 p. 7. SJや彼の周囲を「雄健な筆」で詳述した、「イギリス民の特性を理解する」に資する書物であると【93311】を評する. 【再録】：『研究社月報』 第121號 研究社 1933年6月 p. 1.

【93352】 齋藤勇 「Bailey's Dictionary (蔵書閑談3)」 『英語青年』 第69巻3号 1933年5月 p. 4 (76). SJに言及しながら *Universal Etymological Dictionary* (1721)の有益さと面白さも紹介する. 【17/】 【再録】：『蔵書閑談』 研究社出版 1983年2月 pp. 293-296.

【93431】に追加：

【書評】：「評伝叢書第六回三冊合評：ジョンソン」 『研究社月報』 第137號 研究社 1934年6月 p. 5 (T・M・T). SJの生活力とが印象付けられる書と評す.

【93461】 岡倉由三郎 「あぶく」 『呉岸<sup>くれがし</sup>越勢集<sup>エッセイ</sup>』 岡倉書房 1934年6月 pp. 172-175. 甲と乙とがべらんめい調で、SJの場合も含んだ 'king's evil' について語り合った文章. 本書の「はしがき」によると、浪野<sup>なにの</sup>呉岸<sup>くれがし</sup>という筆名で1927年12月に発表したものであったらしいが未詳. 【3/】

【949Y3】 ナサニエル・ホーソン/小出正吾(訳) 『傳記ものがたり』 羽田書店 1949年11月再版(PTA文庫) 《147+2頁》. Nathaniel Hawthorne 著 *Biographical Stories* (1842)から, "Samuel Johnson"の章もpp. 54-77に訳出されている. 再版で記述したが, 初版については未詳. 【9/】

【95064】 朱牟田夏雄 「ジョンソン」 『世界文學辞典』 中野好夫(編集代表) 河出書房 1950年6月 pp. 207-208. 経歴と主要作品を辿った原稿用紙3枚分の項目で, 『ジョンソン博士とその群』(93311)とJohn Baileyの*Dr. Johnson and His Circle* (1913)を参考書に挙げている. 「ボズウェル」項はない. 【3/】

【95252】 福原麟太郎 「この世に生きること(1)」 『新潮』 第49年5号 新潮社 1952年5月 pp. 6-14. 刊行予定書の脱稿を延び延びにしていた福原が, 「私が, ドクター・ジョンソンを喜んで読むのは, この大博士も亦さうであつたらしいからである」と起こし, SJの言い分を紹介してから, 「ジョンソンは, いいおやぢである」と結んだ部分と, 「健康な批評家」(94131)を書いた頃から福原がSJを好んで読むようになったとの述懐が見られる. 【再録】: 『この世に生きること』 文藝春秋新社 1954年10月 pp. 9-28. 『福原麟太郎著作集 6: 随筆II 身辺』 研究社出版 1969年2月 pp. 211-231.

【954X3】 福原麟太郎 「ドクター・ジョンソン」 『辞書』 創刊第1号 研究社辞書部 1954年10月 p. 1. *Dictionary*編纂の報酬に触れて当時の£1を1954年の¥5,000と換算. またその原稿カードとSJが改訂用に書き込みをした初版本を見てきた話. 【17/】 【再録】:【955X1】 pp. 80-83.【96981】 pp. 179-183.

【954Y1】 福原麟太郎 「英文學理解のために: 私の選んだ五つの作品」 『文庫』 岩波文庫の會 第38號 岩波書店 1954年11月 pp. 1-4. SJを読んでもらいたいと思いながら, 「評傳文學として, 獨立して, 作品として面白い」ところの"Pope"(1781)に18世紀を代表させている. 【復刻】: 『雑誌『文庫』復刻版1954』 岩波書店 1997年1月. 【再録】: 【955X1】 pp. 179-188.

【95542】 内多毅 「十八世紀英文学における諷刺」 『季刊海潮音: 英文学雑誌』 第8号 京都: 山口書店 1955年4月 pp. 11-17. 諷刺文学を王政復古期からSJまで展望し, それまでのThe Comic Satireであった流れが*Vanity*に至って



The Tragic Satireに替わったとする。 【14/】

【95641】に追加：

【書評】：『英語と英文學』 第18号 研究社出版 1956年5月 p. 14.

【95761】に追加：

【典拠】：齋藤勇 「イギリス文学史」 『英語と英文學』 第32号 研究社出版 1957年9月 p. 2.

【957Z2】 ジョン・メイシー/福原麟太郎(訳) 『世界文学物語』 創元社 1957年12月(世界少年少女文学全集第二部17巻) 《339頁》. 18世紀英国の散文を語った第32章(pp. 196-205)で, SJについて「芸術において重要な作品を残していないただひとりの重要な作家」と評している. また次章冒頭には"Pope"から引用がされている. 【原著】：John Albert Macy, *The Story of the World's Literature* (1925). 清水阿やによる抄訳. 【10/5】 【参考：926X1】

【95836】 H 「現代に生きる古典:ボズウェル:サミュエル・ジョンソン伝」 『朝日新聞』 1958年3月6日 p. 6. SJの表現の力と思想の力が一体となっている発言の例を*Life*に読み出す. また, 彼の人生観が明るくなかったからこそ人間だけに許された「会話」を精一杯楽しんだのであろうと考える. 【10/3】 【4/1】 【再録】：堀秀彦 「『サミュエル・ジョンソン伝』ボズウェル」 『現代に生きる古典』 春陽堂書店 1958年4月 pp. 243-247.

【95841】に追加：

【再録：96113】

【95861】 森安幸夫 「ジョンソン博士のシェイクスピア論について」 『不凋花：英文学研究と省察』 京都：山口書店 1958年6月 pp. 170-178. ロマン派により神格化されたShakespeare像から劇場という現実空間での読み直しへと移行した先に両者を止揚した批評を期待するとき, SJが立脚したところの「深い叡智と愛情とのほとんど奇蹟的な融合のうえに成立した人間的立場」が想起されてくることを, 彼の言葉に裏付けようとした未発表であった論文. 【19/】



【95942】 高柳俊一 「中国と啓蒙期の英文学：イエズス会員による中国紹介記の影響」 『ソフィア』 第8巻春号 1959年4月 pp. 29-52. 17～18世紀にキリスト教圏が中国に寄せた賛否の反応を概観するなかで、SJの中国への関心をGM(1742)や*Life*に読み出し、彼流の合理主義に触れる. 【11/】 【再録:977Z3】

【959X8】 中村保男(譯) 「批評集」 『シェイクスピア全集10：ハムレット』 福田恒存(譯) 新潮社 1959年10月 pp. 215-227. 冒頭(pp. 217-218)に、*Shakespeare* (1765)における*Hamlet*への注釈を総括した部分(Yale版ではp. 1011)を抄訳する. 【19/】 【参考:948Y1, 9752, 978X1】

【96011】 「ポーブとジョンソン：クラシシズムからロマンティシズムへ(一)」 『詩聲』 第25號 詩聲社 1960年1月 pp. 33-38. 4節とSJの「メタフィジカルきらいを紹介」した余論からなる. その第3節で、SJにおける文学の批評基準では、「理性」と「真理」に従うもの～「趣味」と「感情」に従うもの～ドグマ的な規則に従うもの、と格付けされていたと解説. 執筆者名の表示はない. 【10/1】

【96031】 矢本貞幹 「批評史の転換：JohnsonとColeridgeの間」 『英語青年』 第106巻3号 1960年3月 pp. 25-26(137-138). *Lives*からColeridgeの*Biographia Literaria* (1817)迄の30余年間に文学批評が変化していった理由を考察する. 【10/1】 【再録:96141, 96892】

【96044】 F. N. 「Johnsonと舞蹈病」 『英語青年』 第106巻4号 1960年4月 p. 31(199). SJの持病とされてきた St. Vitus's dance を略説. 【3/】

【96082】 松原正 「シェイクスピア批評家紹介 1」 『シェイクスピア全集4：夏の夜の夢 月報』 新潮社 1960年8月 pp. 3-4. Nicholas Rowe (1674-1718) やThomas Rymer (1641-1713) に触れて、SJについては「シェイクスピアを尊敬しながらも偶像崇拜という段階に至らなかった」とする. 【19/】

【960X4】 福原麟太郎 「Dr. Johnsonの時代におけるGray」 『トマス・グレイ研究抄』(*Essays on Thomas Gray*) 研究社出版 1960年10月 pp. 41-47. 「今までやって来た間に自然に了解するようになったグレイとその周囲のことを…百五十枚ほどの総説にまとめ」(序文)とある「トマス・グレイ、その時代と人と詩論」

(pp. 23-96)のうちの第5節で, SJのGray評のうち特に“He was dull in a new way, and that made many people think him GREAT.”(*Life*の1775年3月28日の記述)は, Gray (1716-71) をRomanticismに位置付けたSJの卓見とする. 【22/】 【再録】:『福原麟太郎著作集3』 研究社出版 1969年5月 pp. 236-246.

【96113】 工藤直太郎 「ジョンソン博士と空中飛行」 『武蔵野のほとりで』 早稲田大学出版部 1961年1月 pp. 95-103. SJの著述や書簡に, 当時話題になっていた軽気球や飛行術に対する言及を拾う. 【11/】 【初出: 95841】

【96143】 中村敬 「Ninth Commandment」 『英語青年』 第107巻4号 1961年4月 p. 31(207). SJがGarrickを腐して引用した “Thou shalt not bear false witness against thy neighbour.” の取材先は, JBが伝えたような第九戒ではなく, 実は第八戒だったのではないか. 【4/1】 【参考】:『英語青年』 第107巻6号 1961年6月 p. 33(321) (石田直矢).

【96291】 に追加:

【書評】:『英語青年』 第108巻12号 1962年12月 p. 45(705) (村上至孝).

【96571】 西村孝次 「文学としての辞書」 『學鐙』 第62巻7号 丸善 1965年7月 pp. 52-55. 「希代のなまけもの」がものした「かれの図体そっくりの二巻本の辞書」のこと. 【17/】 【参考】: 紅野敏郎 「<sup>こうの</sup>『學鐙』を読む(190): 西村孝次」 『學鐙』 第104巻2号 2007年6月 pp. 26-31. 『『學鐙』を読む・続』 雄松堂出版 2009年10月 pp. 470-475.

【965X1】 M. N. 「ジョンソン博士の記憶力」 『英語青年』 第111巻10号 1965年10月 p. 49(701). Anne女王(在位1702-14)に<sup>るいれき</sup>瘰癧を触ってもらった2歳の時の記憶をSJがとどめていたこと. 【3/】

【96672】 ジュディス・クック/仲村明子(訳) 『地の果てからの生還: 女囚メアリー・ブライアントの波乱の生涯』 徳間書店 1966年7月 《xi+315頁》. 第17章である「弁護士ジェイムズ・ボズウェル」(pp. 250-262)でJBの人物が紹介されている. 第18章〜「エピローグ」(pp. 263-309)では, 辻強盗で流刑になったMary Bryant(1765-?)のオーストリア脱出劇に感動した晩年のJBが, 再逮捕された彼女に

恩赦が与えられるよう尽力し、さらにポケットマネーから£10の年金まで彼女に提供する。 【原著】: Judith Cook, *To Brave Every Danger* (1993). 【4/3】

【96794】 福原麟太郎 「辞書学校の教科書」 『月刊《百科》』 第61号 平凡社 1967年9月 p. 1. SJが書いた *The Plan of a Dictionary* (1747) は辞書学校の教科書にもしたいくらい周到であると感服する。 【17/】

【967X1】に追加:

【書評】: 『英語青年』 第114巻4号 1968年4月 p. 38(250) (木原研三).

【96831】に追加:

【参考】: *Philological Quarterly*, XLVIII: 3 (July, 1969), p. 367.

【96882】 「片々録: ジョンソン協会総会」 『英語青年』 第114巻8号 1968年8月 p. 53(549). 5月27日に開かれた第1回総会には約40名が出席し、会報も第1号が発行されたとの報告。 【6/1】

【968Z2】 吉本良典<sup>よしふみ</sup> 「『アイドラー』について」 (Some Observations on *The Idler*) 『英米文学』 関西学院大学英米文学会 第13巻1号(通巻21号) 1968年12月 pp. 44-54. SJが "*Idler*" という語に込めたであろう人生観と文学観を *Idler* その他の著述に読み出し、人生とは「仕事や学問や談話を楽しんで心を慰められるべき放浪者のような儚い存在で、偉大な文学とは「人々を楽しませる美しさ」と技巧」の背後に「人生の厳粛な事実を感じさせる」ものであったとする。 【16/】

【96921】 柴田錬三郎 『柴錬巷談』 集英社 1969年2月 pp. 29-30. *Dictionary*への言及として、「秀才諸君が、英語を勉強できるのは、ジョンソンのおかげである」とする。日本ジョンソン・クラブ会員星川裕章氏よりの情報。 【17/】

【96922】 「片々録: The Johnson Birthplace Appeal」 『英語青年』 第115巻8号 1969年2月 pp. 54-55(122-123). Edmund Blunden (1896-1974) が Lichfield に残されている SJ の生家を整備するための寄付を募集しているとの報。 【6/1】

【96981】最終行の【月報】：尾島庄太郎 「ジョンソン博士の家」 pp. 1-3.  
に追加：

Londonの袋小路を楽しみながらGough Squareを探訪した思い出。また、  
この月報には図版6点が収められている。 【6/1】

【969X3】 成田成寿(編) 『英語歳時記：雑』(*An English and American Literary Calendar: Miscellaneous*) 研究社出版 1969年10月 《vi+471頁》。 SJの  
London礼讃(p. 22), 縞馬と*Lobo's Abyssinian Voyage* (p. 128), SJの飲茶癖(p.  
274)等への言及。 JBについては*Corsica* (pp. 155-156), *Tour to the Hebrides* (p.  
328), *Life* (pp. 228, 264, 314, 328, 421)などと言及されている。

【97033】 松原慶子 「『詩人の伝記について』」 *Mulberry* 愛知県立大学英  
文学会 第20号 1970年3月 pp. 80-89。 中世以来の英国文人・詩人の伝記  
(集)を歴史的に展望し寸評を与えながら、18世紀になって伝記と作品理解とが相補  
関係になったと指摘し、SJなりの視点で伝記と批評とが*Lives*において意識的に融合  
されるに至ったとする。 【22/】

【97244】 福原麟太郎 「書斎の陽だまり」 『波』 第27号 新潮社 1972  
年4月 pp. 40-45。 SJの「人生の苦勞に打ち勝って一休みしている巨人といっ  
た風格」に福原が惹かれたとの述懐を含む。

【97342】 秋山徹夫 『イギリス詩史：伝統と想像』(*An Introduction to English Poetry*) 八潮出版社 1973年4月 《270頁》。 SJによるDonne評価(p. 104),  
SJの文学傾向(p. 150), Cowperとの都会観での相違(p. 153), Wordsworthからの  
挑戦(p. 165)等の話題を含む。

【97411】 諏訪部仁 「スコットランドの旅(その一)：ジョンソンとボズウェル」  
*Pursuit* 東京大学大学院英語英米文学専攻「パースト」編集部 第12号 1974年  
1月 pp. 1-29。 SJとJBのScotland旅行での足跡を1773年8月14日～10月3  
日に辿る。 【21/】 【再録】：改筆後【98831】および【00981】 pp. 1-25。

【977Z3】 高柳俊一 「中国と啓蒙期の英文学：イエズス会員による中国紹介記  
の影響」 『精神史のなかの英文学：批評と非神話化』 南窓社 1977年12月 pp.

101-127. SJの中国への関心を*GM*(1742)や*Life*に読み出し、彼流の合理主義に触れた部分が末尾に見られる。 【初出：95942】 【11/】

【97852】 出口保夫 『私のロンドン案内』 主婦の友社 1978年5月(TOMO書77) 《224頁》。 第6章7節「ジョンソン博士とパブ」(pp. 120-121)はSJ行きつけの店について。第9章「文学者たちのロンドン」ちゅうの第6～9節が「ジョンソン博士と宣長」(pp. 164-165),「ジョンソン記念館と『英語辞典』」(pp. 165-168),「コーヒー・ハウス誕生」(pp. 168-170),「スン・ジョンズ・ゲイトと『紳士雑誌』」(pp. 170-171)で、SJに注目している。読まれずして敬われる存在として本居宣長に似るとしながらも、*Dictionary*は内容的に『古事記伝』に及ばずとの見解もあり。その他pp. 5, 86, 123, 206, 222などでSJへの言及が見られる。 【6/1】

【98034】 北村達三 「ジョンソンなどの貢献」 『英語を学ぶ人のための英語史』 桐原書店 1980年3月 pp. 172-176. *Dictionary*が刊行後100年は凌駕されなかったとする。 【17/】

【98272】 出口保夫 『英国紅茶の話』 東京書籍 1982年7月(東京選書77) 《241頁》。 「イギリス文学と紅茶」と題した第3章に「ジョンソン博士とボズウェル」(pp. 133-137)の節がある。Londonに出てきてから身についたSJの飲茶の習慣をJBに拠って描く。 【11/】

【98325】 A. T. ウォーラック/竹内佳子(訳) 『女たちの栄光』 集英社 1983年2月 《366頁》。 【99051】に言及されている現代小説。「ハレル」章(pp. 199-221)の中心人物John Harrell BarberはSJに引き取られた黒人 Francis [Frank] Barber (c.1742-1801)の5代あとの子孫で、Ford自動車会社の副社長という設定。そのなかでSJへの言及も見られる。 【原著】: Anne Tolstoi Wallach, *Women's Work: A Novel* (1981). 【9/】

【98335】 高柳俊一 「啓蒙期とユートピア」 『ユートピア学事始め』 福武書店 1983年3月 pp. 115-140. 本書の第四章で、そのなかの「教訓物語」(pp. 133-140)が*Rasselas*の梗概を示すとともに、「幸福の状態は…自分の魂のなかにある」との結論では*Candide*(1759)と一致するとしながらも、人は地上の楽園に在って満足し得ないという前提はSJ独自のものであるとも指摘する。 【18/】



【984Z4】のコメント文に追加：

…また、*Lives* の52篇を通読すると *A Life of Poetry (and its Authors)* として、SJがJBに手ほどきをした近代的な伝記を見ることができる。

【98715】 藤井哲 「*Encyclopaedia Britannica*諸版の有用性について：英国社会・文化研究の一手段として」 『福岡大学総合研究所報』 第90号 1987年1月 pp. 27-42. *Britannica*初版(1768)～第15版(1974)に同一項目，例えば "Johnson"項を読み比べれば，英語圏でのSJ観の歴史を200年にわたって辿れるであろうと提案する。 【10/5】 【参考：98912, 99436, 9965a】

【987Z5】 バーバラ・W・タックマン/<sup>おおこそよしこ</sup>大社淑子(訳) 『愚行の世界史：トロイアからヴェトナムまで』 朝日新聞社 1987年12月 《口絵[4]+前付[4]+434+索引vi頁》。 第四章「大英帝国の虚栄：英国，アメリカを失う」(pp. 141-258)において，SJ/JBの対米観や当事者への人物評などが，断片的ながら言及されている。

【原著】：Barbara W. Tuchman, *The March of Folly: From Troy to Vietnam* (1984).

【98881】に追加：

【参考】：Johnsonian News Letter, XLVIII:3-XLIX:2 (1988-1989), p. 3.

【99074】に追加：

【参考】：Johnsonian News Letter, XLIX:3-L:2 (1989-1990), p. 4.

【991X2】 ダグラス・ブッシュ/<sup>たがやす</sup>塚野 耕(訳) 『英詩の主潮：チョーサーから現代まで』 広島：文化評論出版 1991年10月 《381+索引11頁》。 SJへの言及が，形而上派 (p. 101), 古典主義 (p. 143), Gray (p. 155), SJ作模倣詩 (pp. 180-182), 想像力 (p. 220)との関連で見られる。 【原著】:Douglas Bush, *English Poetry: The Main Current from Chaucer to The Present* (1952). 【10/1】

【99354】 ロイ・ポーター/田中京子(訳) 『健康売ります：イギリスのニセ医者の話 1660-1850』 みすず書房 1993年5月 《xi+380+xlvi頁》。 SJによる「ニセ医者」の定義 (pp. 6-7) と広告に対する考え (pp. 134, 169, 355), 薬なら何でも試してみる主義のJB (pp. 83-84, 348) への言及。 【原著】:Roy Porter,



*Health For Sale: Quackery in England 1660-1850* (1987). 【11/】 【4/3】

【99437】 永嶋大典 「ジョンソン」 『世界日本キリスト教文学事典』 遠藤祐(他編) 教文館 1994年4月 pp. 310-311. SJの宗教的側面を押さえながらその生涯と業績を4枚少々に凝縮し, *Vanity*と*Rasselas*とに注目する. 【24/】

【99476】 早川勇 「語学者としてのウェブスターの実像」 『言葉と教育: 八田重雄博士喜寿記念論文集』 中部日本教育文化会(編) 岡崎学園短期大学(発行) 1994年7月 pp. 244-269. 綴字ではSJの権威を認めていたWebsterであったが, 辞書編纂ではSJを攻撃しながら結局SJの枠組みを踏襲していたと指摘する. そしてWebster版(1828)の特徴をSJ版との比較において示そうとする. 【17/】

【99773】 紅野敏郎 「『學鐙』を読む(101): 工藤直太郎」 『學鐙』 第94巻7号 丸善 1997年7月 pp. 60-65. 科学に対するSJの進歩的姿勢を【95841】に読み, John Gayの*The Beggar's Opera* (1728)に対するSJやJBの批評にも触れる. 【11/】 【再録】: 『『學鐙』を読む』 雄松堂出版 2009年1月 pp. 537-542.

【99881】 船戸英夫(他編) 『じてん・英米のキャラクター』 (*A Dictionary of Imaginary Characters*) 研究社 1998年8月 《xv+814頁》. 関連する項目として, “Boswell”(pp. 83-84), “Cock Lane Ghost”(p. 138), “Great Cham of Literature”(p. 274), “Hodge”(p. 322), “Johnson”(pp. 397-398), が見られる.

【99911】 リチャード・ゴードン/倉俣トーマス旭, 小林武夫(訳) 『歴史は患者でつくられる』 時空出版 1999年1月 《[iv]+394+V頁》. 著名人たちを病跡学(pathography)的手法で追跡した本書に, 淋病に19回罹った「ジェイムズ・ボズウェル(1740~95)」という節(pp. 141-153)がある. 【原著】: Richard Gordon, *An Alarming History of Famous and Difficult Patients* (1997). 【4/3】

【99924】 マイケル・イグナティエフ/添谷育志, 金田耕一(訳) 「形而上学と市場: ヒュームとボズウェル」 『ニーズ・オブ・ストレンジャーズ』 風行社(発行)/開文社(発売) 1999年2月 pp. 119-150 & 232-239. 本書の第3章で, 平然と死に赴こうとするDavid Humeに接して, 敬神的なJBは不安を覚える. JBら近代人にまわりつく諸々のニーズに照らしながら, Humeにおける無神論の立脚点を並

べる。 【原著】: Michael Ignatieff, *The Needs of Strangers* (1984). 【4/3】

【99952】 草原昭喜 「福原先生とジョンソン大博士」 『芸術・随想誌: 備後春秋』 福山: 備後春秋編集部 第68号 1999年5月 pp. 59-66. 連載記事「叡智の文人学者 福原麟太郎先生」の第13回目で、福原のSJへの関心を辿る。 【参考: 96981】

【00038】に追加:

【再刊】: 『ジョン・ランプリエールの辞書』 上下巻 東京創元社 2006年5月(文庫).

【00039】 アンドレ・モロワ／稲村善二(訳) 『伝記の諸相』 国立群馬工業高等専門学校 2000年3月 《188頁》. 関連箇所はpp. 52-54で、SJの伝記観を引用し、*Lives*にLytton Stracheyの筆致を指摘。道徳判断の介入しないStracheyに芸術性を認める。【原著】: André Maurois, *Aspects de la Biographie* (1930) 【22/】

【000Z1】 アンドレア・ラヴ／常磐高子(訳) 「ジェームズ・ボズウェル」 『あなたは有名人のエッチをどれだけ知っていますか? : お金持ち125人のほんとうのエッチ!』 グリーンアロー出版社 2000年12月 pp. 129-132. “Boswell Papers”からJBの性の相手が集められ、著者による穿ったコメントが添えられる。

【原著】: Andrea Love, *Social Sex Lives of the Rich & Famous* (1998). 【4/3】

【00276】 「サミュエル・ジョンソンの箴言」 『読んで覚える楽しい英語: Let's Enjoy Reading Lively English Aloud』 堀口俊一(監修) 野村出版研究所 明日香出版社 2002年7月 pp. 100-101. 暗唱すべき名文集の第43課として, "It matters not how a man dies, but how he lives."が引用・解説されている。 【9/】

【00283】 島弘之 「ジョンソン」 『新カトリック大事典 第3巻: シャ〜ハキ』 其編纂委員会 研究社 2002年8月 p. 337. 生涯の業績を挙げて、SJがイングランド国教会の熱心な信者であったと結んだ。原稿用紙1枚分の項目。 【10/5】

【00372】 マーティン・F・ウェクリン／谷口伊兵衛[勇](訳) 『英語の考古学: 英語史提要』 而立書房 2003年7月 《253頁》. *Dictionary*前付の

“Grammar”から母音と名詞の複数形に触れた部分を引用・施注(pp. 207-209)する.

【原著】: Martyn F. Wakelin, *The Archaeology of English* (1988). 【17/】

【00373】 江藤秀一 「イギリス〈文学〉」 『日本語・日本文化学類教員の外国語研究と教育』 今井雅晴(編) 筑波大学第二学群 2003年7月 pp. 56-92.  
江藤の研究経歴をインタビューした記事であるが、そのなかにSJやThomas Rowlandson(1756-1827)に対する思い入れを語った部分が含まれている.

【00452】に追加:

【再刊】: 『英語の冒険』 講談社 2008年4月(学術文庫).

【00496】 Daisuke NAGASHIMA[永嶋大典]. "Deepest Gratitude to the late Lady Mary Eccles." *Johnsonian News Letter*. Ed. Robert DeMaria, Jr. LV: 2 (Sept. 2004), pp. 77-78. 夫婦でHyde Collectionを築き、その夫と死別後再婚しLady Mary Ecclesとなっていた彼女が、2003年に死去した. その報を受け、学恩を彼女に謝し、コレクションを見学した際の思い出を綴った追悼文. 【6/1】

【00497】 ハワード・ジャクソン／<sup>みなみでこうせい</sup>南出庚世(他監訳) 「サミュエル・ジョンソン(1709-84)」 『英語辞書学への招待』 大修館書店 2004年9月 pp. 60-65.  
本書の第4章5節に相当し、*Dictionary*編纂に際してのSJの意図を*Plan* (1747)から読み解き、その作業経緯についても触れている. 【原著】: Howard Jackson, *Lexicography: An Introduction* (Routledge, 2002). 【17/】

【00583】に追加:

【書評】: 『英語青年』 第152巻6号 2006年9月 pp. 46-47(306-307) (笠原順路).

【005X3】 市川泰男 「*Dictionary Britannicum*の改訂と『ジョンソン辞典』について」 『人文研紀要』 中央大学人文科学研究所 第54号 2005年10月 pp. 37-69. Nathan Baileyが編纂した*Dictionary*初版(1730)とその第二版(1736)への改訂が、SJの*Dictionary*に与えたであろう影響を検証するために、各辞典のD項に収録された派生語を比較する. 【17/】

【005Y4】 加賀屋俊二 「サミュエル・ジョンソンの『スウィフト伝』：偏見と評価」『言語表現と創造』 藤本昌司(編) 鳳書房 2005年11月 pp. 167-182. “Swift”におけるSJの「強い偏見」を容認し、略伝という制約の中でSJが「作品からその作家を正当に評価しようとする真摯な姿勢」を貫いていたと弁護とする. 【22/】

【00621】 江藤秀一 「ドクター・ジョンソンのヘブリディーズ諸島の旅：マル島からインヴァラリーまで」(Dr Johnson's Journey to the Hebrides: From the Isle of Mull to Inverary) 『シルフェ』 新潟：シルフェ英語英米文学会 第45号 2006年2月 pp. 1-17. *Journey* (1775)で旅程を辿るなか、1773年10月14日にMull島に上陸→16～17日にUlva島を素通り→17～19日のInch Kenneth島→19～21日にIona島→21～22日再度Mull島→22日本土に上陸しObanに泊→23日にInverary泊した際に、SJが見聞き記した所感から彼の関心の所在を考察する. 【21/】 【再録：00861】

【00631】に追加：

【書評】：『読売新聞』 2006年5月21日 (青柳正規). 【参考：00861】

【00632】 江藤秀一 「ドクター・ジョンソンと1745年のジャコバイトの乱：フローラ・マクドナルドとマルコム・マクラウドを中心に」『筑波英学展望』 筑波大学現代語・現代文化学系筑波英学展望の会 第24号 2006年3月 pp. 23-46. Flora MacDonaldとMalcolm Macleodの生涯に触れながら1745年のJacobitesの反乱の概要を纏め、SJが*Journey* (1775)のなかでその乱にあまり触れなかった理由を、現地で「氏族民の対立関係に起因するわだかまり」(p. 44)を感じ取ったSJが「関係者への配慮」(p. 45)を働かせたからであろうと推測する. 【21/】 【再録】：【00861】 pp. 216-241&247-249.

【00633】 アネット・ホープ／野中邦子(訳) 「『英語辞書』と料理本：ジョンソン博士の愛したロンドン」『ロンドン：食の歴史物語：中世から現代までの英国料理』 白水社 2006年3月 pp. 97-136. 本書の第4章で、SJの略伝(pp. 97-103)に続いて、彼の都会志向(pp. 103-105)、食への姿勢(pp. 105-111)、飲料の嗜好(pp. 111-117)、タヴァーンと彼のクラブ(pp. 117-118)などへの言及がある. 【原著】：Annette Hope, *Londoners' Larder* (2005). 【3/】 【11/10】

【00634】 佐伯彰一 「自伝と伝記の奇妙な関係:日本の伝記伝統を求めて」『作家伝の魅力と落とし穴』 勉誠出版 2006年3月 pp. 187-217. 「伝記家」であるはずのJBが「自伝人間」でもあるという二重性に注目する。また他所で、*Lives*を「少々雑多すぎるのに、今も魅力つきない」としたり(p. 119), Henry James伝を纏めたLeon EdelがJBを“a supreme model of life writing”と崇めるのに待ったを掛けと言及したり(p.122), *Life*の活力源がJBとSJの取り合わせや‘ethnic’な触れ合いにあると推測している(p. 127). 【4/1】

【00635】 Noriyuki HARADA [原田 範 行]. “‘Like the Monument’: The Meaning of Samuel Johnson's *Irene* Reconsidered.” 『杏林大学外国語学部紀要』第18号 2006年3月 pp. 83-105. 【000&1】の本文を多少刈り込み、僅かに補正を施し、主に引用と尾注を簡略にして全体の短縮化を図った文章。 【15/】

【00636】 稲村善二(訳) 「ジェイムズ・ボズウェル著『サミュエル・ジョンソンに随行のヘブリディーズ諸島旅日記』(4)」『学校法人昌賢学園論集』 群馬社会福祉大学 第4号 2006年3月 pp. 57-78. 【00538】の続きで、*Tour to the Hebrides* (1785)から、Montroseを経てAberdeenに滞在した1773年8月20日～24日の記述、すなわちOxford Standard Authors版のpp. 202-226 (Hill版*Life*で第V巻 pp. 68-105に相当する箇所)を訳出する。 【4/2】 【参考:00631, 00791】

【00637】 原田範行 「特別講演:代作, 合作, 贋作に見るイギリス18世紀文学」『中部英文学』 愛知:日本英文学会中部地方支部 第25号 2006年3月 pp. 1-17. SJの代作に勤しんだJohn Hawkesworth (1720-73)とか、贋作視されるRowley詩やOssian詩を産み出した、18世紀の英国にただよう「いかがわしさ」を窺うなかで、自身でもJuvenalisを捻っていたSJが「模倣や改変の愉しみを知り尽くしていた」存在であったとして頻繁に引き合いに出される。第57回支部大会(2005年10月15日)での特別講演の原稿に加筆したもの。 【11/10】

【00641】 原田範行 「ジョンソンの辞書の愉しみ」『英語青年』 第152巻1号 2006年4月 pp. 28-29. SJにとって「辞書編集が予想外に面白く感じられた本当の理由」に迫るための鍵を、「観察」(observation)と見定める。 【17/】

【00651】 江藤秀一 「ドクター・ジョンソンのラーセイ島への旅」(Dr Johnson's Journey to the Isle of Raasay) 『十八世紀イギリス文学研究 第3号:躍動する言



語表象』 日本ジョンソン協会(編) 開拓社 2006年5月 pp. 102-121 & 384-385(synopsis). JBの*Tour to the Hebrides* (1785)とSJのMrs Thrale宛書簡とを読み合わせることで、SJが*Journey* (1775) 執筆に際してRaasay滞在4日間の見聞をどう利用したかを考察する。 【21/】 【再録: 00861】

【00652】 原田範行 「「公共圏」の秘密: 18世紀ロンドンとその文学的表象」(Privacy in Public Square: Johnson, London, and Eighteenth-Century English Literature) 『十八世紀イギリス文学研究 第3号: 躍動する言語表象』 日本ジョンソン協会(編) 開拓社 2006年5月 pp. 142-158 & 387-388(synopsis). 「「公共圏」に隠れた非・公共的な秘密, そしてまた「公共圏」という概念を導入することで自ずと漏れ落ちてしまうような文学的表象」を, 「「クラブ」的人脈の解体・分化・再編」, 「ロンドンの流動性と匿名性」, 「ロンドンからの逃避と超脱」の視点で論じながら, SJにLondon逃避願望を指摘する。 【11/】 【書評】: 『英文学研究』 日本英文学会 第84巻 2007年11月 pp. 203-207 (小林章夫).

【00653】 \*江藤秀一 「ドクター・ジョンソンの『スコットランド西方諸島への旅』と18世紀のスコットランド」 筑波大学博士(文学)論文 2006年5月31日授与(DB02214-2006) 《286+図版6+地図1頁》. 本論文の筑波大学附属図書館における資料IDは10007000009. 【21/】 【00861】として公刊された.

【00661】 藤井哲(編著) 『日本におけるサミュエル・ジョンソンおよびジェイムズ・ボズウェル文献目録(1871-2005)』(A Bibliography of Johnsonian and Boswellian Studies in Japan (1871-2005)) ナダ出版センター 2006年6月《xviii+274+索引36頁》. 明治4年以降の135年間に我が国で発表されてきたSJ/JBに関連した文献を約1,600件集め1,200枚に記述した書誌で, 【99838, 00037, 0033a】に大幅に加筆したもの. これを主論文として博士(文学)の学位が2007年に上智大学より授与された。 【1/2】 【書評】: 「日本のジョンソン学, 新たな一歩前進」『日本英学史学会報』 第110号 2006年9月 pp. 7-8 (鶴田学). 『英語年鑑2008』 研究社 2008年3月 p. 67 (出来成訓). 『ソフィア』 第56巻3号(通巻223号) 上智大学 2008年3月 pp. 138(476)-139(477) (小林章夫). 【参考: 006Y2】 【参考】: *Johnsonian News Letter*, LVIII: 1 (March 2007), pp. 4-5 & 31-32.



【00662】 福本<sup>ただゆき</sup>幸之 「海外新潮イギリス文学(3):100年ぶりの新版」(書評) 『英語青年』 第152巻3号 2006年6月 p. 30(158). Roger Lonsdale ed., *The Lives of the Most Eminent English Poets*, 4vols. (OUP, 2006)を, user-friendlyな編集と紹介する. 【22/】

【00663】 「片々録: ドクター・ジョンソン生誕300年記念行事ウェブ・サイト開設」 『英語青年』 第152巻3号 2006年6月 p. 60(188). 「2009年9月18日で生誕300年を迎えることを記念して各種の催し物の準備がすでに始まっており, ジョンソンの故郷リッチフィールドのジョンソン生誕記念館やロンドンのドクター・ジョンソンス・ハウスを中心にしたドクター・ジョンソン生誕300年記念委員会によるウェブ・サイト(<http://www.johnson2009.org>)が作られ, 今後予定されている各種行事の情報が掲載されている。」(全文). 【6/1】

【00664】 ロバート・L・ゲイル/高尾直知(訳) 『アメリカ文学ライブラリー 1: ナサニエル・ホーソン事典』 雄松堂書店 2006年6月 《口絵1+vii+772頁》. SJもしくはJBに関連する項目は, “*Biographical Stories for Children*”(pp. 46-50), “*The Blithedale Romance*”(pp. 53-59), “*Bute*”(p. 90), “*Goldsmith*”(p. 246), “*The Intelligence Office*”(p. 331), “*Lichfield and Uttoxeter*”(p. 357), “*Our Old Home*”(pp. 472-485), “*The Threefold Destiny*”(pp. 652-653), “*West, Benjamin*”(pp. 690-691). 【原著】: Robert L. Gale, *A Nathaniel Hawthorne Encyclopedia* (1991). 【10/4】

【00665】 本吉<sup>ただし</sup>侃 『辞書とアメリカ: 英語辞典の200年』(*The Development of American Lexicography 1798-2003*) 南雲堂 2006年6月 《410頁》. 本書におけるSJ絡みの話題は以下の通り. SJ版*Dictionary*の編纂方針と特徴を辞書史的視点で総括(pp. 13-19). Thomas Sheridanが1780年に試みた発音表記とSJ(p. 20). Noah WebsterのSJ批判(pp. 54, 104-106). 変化する言語に対するSJとWebsterの姿勢(pp. 70-73). SJ版(1755)とWebster版(1828)の見出し語比較(pp. 108-109). 語義の記述で両版を比較し, Websterの「共通項と個々の違いとで定義しようとする」分析的定義を辞書史に対する大いなる貢献と評価(pp. 132-141, 150-151). Webster版が, 1799年のSJ版や1818年にJ. H. Toddが改訂したSJ版から定義と例文を大々的に借用したこと(pp. 141-150). SJ版が米国のJoseph E. Worcesterの諸辞典(1846~1860)に及ぼした影響(pp. 184, 193-200). 【17/】

【00671】 サミュエル・ジョンソン／中川忠(訳) 『ドライデン伝』 京都：あぼろん社 2006年7月 《211+注28+2頁》. *Lives*ちゅうの"Dryden"(1779)を、Hill版第I巻のテキストに拠り、「翻訳になじみにくいと思われるごく一部」(あとがき)を省略して訳出する. 【22/】 【参考：009Z1】

【00672】 「片々録：Gwin J. Kolb氏逝去」 『英語青年』 第152巻4号 2006年7月 p. 59(251). 「サミュエル・ジョンソンの研究家として知られたGwin J. Kolb氏が、4月3日逝去. 86歳.」(全文). 【6/1】

【00673】 川北稔 『世界の食文化 17：イギリス』 農文協 2006年7月 《8+274頁》. 石毛直道が監修して「現代の食文化の特色を基軸に、その形成過程を歴史的にとらえ、食文化の伝統と変化を描きだす」シリーズちゅうの本書に、SJやJBの食生活への言及(pp. 48, 50-52, 64-65, 126, 240), *Dictionary*に参照した食に関連する語からの引用(pp. 155, 189, 209)が見られる.

【00681】 原田範行 「食卓談義から紙上の饗宴へ：クラブの文化と18世紀のアンソロジー」 『食卓談義のイギリス文学』 <sup>えんげつ</sup>圓月勝博(編) 彩流社 2006年8月 pp. 273-310. クラブや食卓での談義は情報発信のための文芸的公共圏ではなかったが、雑誌やアンソロジーの創刊を通して「情報を共有する母集団の拡大」に努めた出版者、とくにSJとの関りが深いCaveやDodsleyに注目する. 【5/3】 【書評】：『英語青年』 第152巻9号 2006年12月 pp. 46-47(558-559) (久野陽一).

【00691】 <sup>たかちお</sup>高知尾仁 『表象のエチオピア：光の時代に』 悠書館(発行)/八峰出版(発売) 2006年9月 《(ix)+361頁》. 光の時代すなわち啓蒙期の英国がエチオピア(=アビシニア)に寄せた民族誌的な興味をJames Bruce著 *Travels to Discover the Source of the Nile, in the Years 1768, 1769, 1770, 1771, 1772, & 1773* (1790) に読み出そうとした本書は、「リッチフィールドの住人や出身者が、エチオピアと表象の上で特別な関わりがあったことに着目」する(p. 19). またBruceに批判的であったSJやJBにも数ヶ所と言及されている(pp. 52-58, 63-64, 74-76, 104-106, 110-112等). 【18/】 【25/】 【書評】：『英語青年』 第152巻11号 2007年2月 p. 48(688) (原田範行).

【00692】 Shigeru SHIBAGAKI [芝垣茂] ed. *The Samuel Johnson Club of Japan Newsletter*. No. 18 (Sept. 2006), 6pp. Ken'ichi NAKAMURA [中村賢一] が“A Study to the Will to Meaning Revealed in *Rasselas*”と題して講じたなどの報告. 【6/1】 【18/】

【006X1】 ジュリー・ピークマン/塩野美奈(訳) 『庶民たちのセックス：18世紀イギリスにみる性風俗』 KKベストセラーズ 2006年10月 《387+索引x頁》. 本書の第3章「快楽に耽る男たつ」(pp. 69-100)で、自らの性遍歴を書き残した18世紀の3人の放蕩者のひとりがJB. “Boswell Papers”から彼の娼婦たちに対する軽蔑的姿勢が読み取られている. JBへの言及は本書の全体にわたって見られるが(pp. 18, 19, 25, 39, 40, 50, 145, 338), SJは2～3箇所で言及される程度. 【原著】: Julie Peakman, *Lascivious Bodies* (2004). 【4/3】

【006Y1】 藤井哲 「貨幣価値の見極め：18世紀英国文学の理解のために」(Evaluating Monetary Value: A Means to Understand 18th-Century English Literature) 『福岡大学研究部論集』 第6巻A：人文科学編第4号 2006年11月 pp. 11-31. 王政復古期から18世紀末まで驚異的な物価安定期にあった利点を活かして、SJ/JBを始めとする18世紀の文献にたびたび言及される金額について、その購買能力を現在および将来において換算するための方法を提案する. 【6/1】

【006Y2】 藤井哲 「日本におけるSamuel Johnson研究の流れ：附：Mrs Piozzi (Thrale)の場合，Hawkinsの場合，Boswellの場合」(A Survey of Johnsonian Studies in Japan, including Mrs Piozzi (Thrale), Hawkins, and Boswell) 『福岡大学研究部論集』 第6巻A：人文科学編第4号 2006年11月 pp. 33-128.

【00661】に記述された文献の数を一年刻みで数え、その分布傾向から4つの時期を設定し、それぞれの時期を意識しながら、40区分された主題識別番号ごとに日本における、主としてSJ研究の流れを展望した360枚. これを副論文として博士(文学)の学位が2007年に上智大学より授与された. 【1/2】 【書評】:『英語年鑑2008』研究社 2008年3月 p. 68 (出来成訓). 藤井啓と誤記している.

【006Y3】 木村正俊, 中尾正史(他編) 『スコットランド文化事典』(*The Scotland Encyclopedia*) 原書房 2006年11月 《xxxii+図8+1,252頁》. 関連する項目は、「ボズウェル, ジェイムズ」(pp. 777-778), 「『ヘブリディーズ諸島旅行

日記』」(p. 787), 「『スコットランド西方諸島紀行』」(pp. 787-788), 「『ジョンソン伝』」(p. 791)で, すべて三國隆志の執筆. 【書評】:『英語青年』 第152巻12号 2007年3月 pp. 48-49(752-753) (服部典之).

【006Z1】 原田範行 「書かれなかった『続・プロシア王フリードリヒ伝』: イギリス18世紀における啓蒙君主の表象」(Preußens aufgeklärter Monarch in der englischen Memoirenliteratur im 18. Jahrhundert: Die ungeschriebne Fortsetzung der “Memoirs of the King” von Samuel Johnson) 『藝文研究』 慶應義塾大學藝文學會 第91-92号 2006年12月 pp. 138-156. PrussiaのFriedrich大王(1712-86)を「イギリスの現体制を批判的に比較考察するための具体的な対象」と看做したであろうSJが, Friedrichの伝記(1756)を1745年の記述をもって途絶させたのは, *Vanity*に通底する諦観ではなく, 個人主義を強く支持していたSJが「ある種の違和感」を覚えたからであろうとする. 【13/】

【006Z2】 大森裕實 「Jack Lynch and Anne McDermott (eds.) (2005) *Anniversary Essays on Johnson's Dictionary* Cambridge: U.K. Cambridge University Press, x+245pp.」(書評) 『JACET中部支部紀要』 名古屋: 大学英語教育学会中部支部 第4号 2006年12月 pp. 63-71. 当該書に収録された政治的面を論じた4篇, 言語的内容についての6篇, 出版文化史的視点による4篇から, 各2篇ずつを紹介する. 【17/】

【006Z3】 浦口理麻 「『ラセラス』におけるimaginationの役割」(On the Role of Imagination in *Rasselas*) *Soundings* サウンディングズ英語英米文学会 第32号 2006年12月 pp. 5-23. SJが*Rasselas*で, 他者へのsympathyを誘因するというimaginationの道徳的側面を肯定したとする. 【18/】 【参考:005X2】

【006Z4】 ジュリアン・バーンズ／<sup>ふるくさ</sup>古草秀子(訳) 『イングランド・イングランド』 東京創元社 2006年12月(海外文学セレクション) 《266頁》. この小説で, 英国らしさを再現させたWight島のテーマパークにDr Johnsonも配置されたが, その傍若無人ぶりに入場客からクレームが殺到し, CEOが彼に面接をする場面(pp. 203-209)がある. 【原著】: Julian Burnes, *England, England* (1998). 【9/】

【00711】 早川勇(訳) 「翻訳: 「ジョンソン英語辞書構想案(1747)」 試訳(その1)」(A Japanese Translation of Johnson's Plan of an English Dictionary



(1747)) 『言語と文化』 愛知大学語学教育研究室 第16号 2007年1月 pp. 199-210. *The Plan of a Dictionary of the English Language*を, 原文にパラグラフ番号(1~75)を振ったうえで, その第1~30パラグラフを訳出する. また言語史的背景と*Dictionary*(1755)前後について, 解題(pp. 199-201)も添えられている. 【17/】 【00771】に続く.

【00721】 伊丹レイ子(監修) 『ジョンソン博士語録』(*What Did Dr. Johnson Say?*) 大阪:パレード(発行)/東京:星雲社(発売) 2007年2月 《217頁》. 文人としてのSJ像を浮き彫りにする発言を, 監修者の教え子たちがJBの *Life* のみから138篇選び, 英和対訳にして48の項目に振り分ける. 多いところでは"marriage"項に11篇, "human nature"項と"religion"項に各8篇が集められている. 【9/】

【00722】 早川勇 「英語辞書構想案におけるジョンソンの辞書編纂理念」(*Johnson's Ideas of Compiling an English Dictionary in His Plan (1747)*) 『文学論叢』 愛知大学文学会 第135輯 2007年2月 pp. 312(1)-291(22). 「「国家・国語」意識の昂揚」(pp. 2-3), 「理性の顕現」(pp. 3-13), 「科学技術に対抗する文学の優越性」(pp. 13-20)との視点で, SJの編纂方針や理念を主に*Plan* (1747)から抽出し考察する. 【17/】 【参考: 00711, 00732, 00771】

【00723】 江藤秀一 「研究ノート: ドクター・ジョンソンのロマン派作家的一面」(*Dr Johnson as a Romantic Writer*) 『シルフェ』 新潟:シルフェ英語英米文学会 第46号 2007年2月 pp. 149-153. SJが自らをロマンス作家に見立てたと思しき部分を*Journey* (1775)から引き, 彼が中世趣味においてロマン派詩人に重なりあうと読む. 【21/】

【00724】 松田修一 「研究ノート: 近代英語のいざない: 英語を学ぶ人のための手引書の試み」(*Invitation to Early Modern English: for English Learners*) 『シルフェ』 新潟:シルフェ英語英米文学会 第46号 2007年2月 pp. 155-162. 動詞の用法を歴史的に跡付けるなかで, 不規則変化を温存しようとしたSJに自国語に対する矜持の念を見る. 【17/】

【00731】 Noriyuki HARADA [原田範行]. "Young Samuel Johnson's Politics and Literary Creativity." 『杏林大学外国語学部紀要』 第19号 2007年3月 pp.

105-120. この20年で盛んな1745年前後のSJの政治的傾向を巡る議論では、古典文学の伝統におけるSJの立ち位置や、実社会の政治的側面への彼の反応や、著述ごとに変化する彼の文学的傾向を勘案する姿勢に欠いていると指摘する。【20/】

【00732】 早川勇(訳) 「「ジョンソン英語辞書(1755)序文」試訳」 *Focus* 愛知大学英米文学研究会 第20号 2007年3月 pp. 104(1)-66(39). *Dictionary*前付の“Preface”を、原文にパラグラフ番号(1~94)を振ってから、全文を和訳。解題で論点と編纂方針の要点を集約する。【17/】 【参考：00722】

【00733】 早川勇 「18・19世紀英語辞書の収録語彙：ベイリーからジョンソンおよびウェブスターへの語彙の拡大」(Word-lists in the Dictionaries by Bailey, Johnson and Webster) 『一般教育論集』 愛知大学一般教育研究室 第32号 2007年3月 pp. 9-20. Bailey版(1730), SJ版(1755), Webster版(1828, 1847)における先行辞書への依存の実態を探り、収録・立項方針を比較し、それぞれを性格付けようとした調査報告。【17/】

【00734】 Shigeru SHIBAGAKI [芝垣茂]. "Samuel Johnson Club of Japan (Excerpts from Newsletter 18)." *Johnsonian News Letter*. Ed. Robert DeMaria, Jr. LVIII: 1 (March 2007), pp. 31-32. 日本ジョンソン・クラブ(SJCJ)が2006年5月21日に会合を持ったとの報告を載せる。【6/1】

【00741】 木下卓<sup>たかし</sup>(他編著) 『英語文学事典』 京都：ミネルヴァ書房 2007年4月 《xii+829頁》. SJ/JBへの言及が多少の見られる項目は、安達まみ筆「ゴールドスミス」(pp. 211-212), 海老澤豊筆「ジョンソン」(p. 276), 岩田託子筆「ベインブリッジ」(pp. 541-542), 青木剛筆「ボズウェル」(p. 576), 樋口欣三筆「リチャードソン」(p. 675-677), 青木筆「伝記」(p. 773)くらいである。【書評】：『英語青年』 第153巻12号 2007年9月 p. 52(372) (小野俊太郎)。

【00751】 江藤秀一 「片々録：ドクター・ジョンソンズ・ハウスの新館長」 『英語青年』 第153巻2号 2007年5月 p. 59(123). LondonのJohnson記念館(<http://www.drjohnsonshous.org>)の館長に、美術史家のStephanie Pickford氏が就任したと報ずる。【6/1】



【00752】 『日本ジョンソン協会年報』(*Annual Bulletin of the Johnson Society*) 日本ジョンソン協会 第31号 2007年5月. 平善介の「『日本ジョンソン協会』の創設の前後」(pp. 1-3)および鈴木善三筆「世異なれば則ち事異なり」(pp. 4-6)が、協会の設立当時を回顧している. 【6/1】 【参考: 98551】

【00753】 横山茂雄(他監修) 『世界文学あらすじ大事典 4: ふん〜われ』 国書刊行会 2007年5月 《ix+690+作家名索引19頁》. 原著の項目を取捨選択し・加筆・翻訳した4巻本で、その最終巻に中川朗子執筆の項目「ラセラス王子物語」(pp. 494-496)が見られる. 【原著】: Frank N. Magill ed., *Masterpieces of World Literature in Digest Form*, 4vols (Harper & Row, 1952-69). 【18/】

【00761】 諏訪部仁 「ジョンソン博士の無知」 *Newsletter* 岩崎研究会 第14号 200年6月 p. 7. 知ったかぶりをせず誤りを率直に認める辞書編纂者SJに敬意を表する. 【11/10】 【再録: 00981】

【00771】 早川勇(訳) 「翻訳: 『ジョンソン英語辞書構想案(1747)』 試訳(その2)」(A Japanese Translation of Johnson's Plan of an English Dictionary (1747): Part II) 『言語と文化』 愛知大学語学教育研究室 第17号(通巻第44号) 2007年7月 pp. 145-159. 【00711】の続きで、後半部の第31~75パラグラフを訳出. またSledd & Kolb (1955)を利用して“A Short Scheme”(1746)からPlanに至る流れを要約した解題(pp. 145-148)もある. 【17/】 【参考: 00722】

【00791】 Shigeru SHIBAGAKI [芝垣茂] ed. *The Samuel Johnson Club of Japan Newsletter*. No. 19 (Sept. 2007), 6pp. 第20回年会でShimpei SAITO[斎藤信平]が“A General View of Shaftesbury's Aesthetics and Johnson's Ethics”を講じ、芝垣、諏訪部仁、市川泰雄、江藤秀一、稲村善二よりJBの*Tour to the Hebrides* (1785)の邦訳に着手したとの報告も. 【6/1】 【4/2】 【参考: 01031】

【007Y1】 早川勇 『ウェブスター辞書と明治の知識人』 横浜: 春風社 2007年11月 《vii+408頁》. 人生観においてSJの*Rambler*に影響を受けていたNoah Websterが(pp. 47-48), 米国で権威を誇っていたSJの*Dictionary*に対抗しようと米国人のための大辞典編纂を1800年に構想し(p. 60), SJの1799年版を参照して先ず

小型版1806年に出版し、その序文でSJの問題点を激しく批判していたが、内容は「質量ともにジョンソン辞書の足元にも及ばなかった」(p. 49)。しかし福音プロテスタントに改宗し「偏狭な愛国主義」を脱していたWebsterによる1828年の大辞典では「ジョンソン批判はそれほど先鋭的なものではない」(pp. 58-59)として、SJと大辞典との類似点およびWebster独自の功績を要約している(pp. 67-74)。また江戸末期～明治の英和辞典編纂にSJ版は敬遠されていたが、母国語を純化しようとしたSJやWebsterの意気込みは明治中期の国語学者を鼓舞するところとなった(pp. 371, 375-376)。SJが本書の随所で言及されることは「人名索引」にある通りである。

【17/】 【書評】:『英語青年』第154巻2号 2008年5月 p. 55(119) (本吉<sup>ただし</sup>侃)。  
【参考: 00131, 00422】

【007Y2】 <sup>よりふじ</sup>依藤道夫 『イギリス小説の誕生』 南雲堂 2007年11月 《456頁》。萌芽期から18世紀までの英国小説を展望した本書の第21章「サミュエル・ジョンソン博士と『アビシニアの王子ラセラスの物語』」(pp. 320-338)が、SJ/JBの文学史的解説と*Rasselas*の梗概を示してから、*Rasselas*が*Cranford*や*Jane Eyre*のような19世紀小説に影響を及ぼして、常識や健全性を尊ぶ英近代小説の基本的イメージを形成させたと評する。また次章「オリヴァー・ゴールドスミスと『ウェイクフィールドの牧師』」(pp. 339-357)ではOliver Goldsmithとの関わりでSJ/JBがたびたび言及されている。 【18/】 【5/3】

【007Y3】 日本イギリス哲学会(編) 『イギリス哲学・思想事典』 研究社 2007年11月 《xvi+762頁》。井上治子による原稿用紙2枚分の「ジョンソン, S.」項(p. 604)が先ずある。他に、*Dictionary*を英語平準化運動のための大事業と見た桑島秀樹の「エンサイクロペディア」(28-31)があり、安西信一の「グランド・ツアー」(123-124)にはイタリア旅行の経験がないSJの劣等感が反映されている。合理主義的SJが過剰な知的遊戯性を形而上的と揶揄した背景に存在論的不安はなかったとする吉村伸夫の「形而上派詩人」(147-148)、*Dictionary*で‘sublime’を規定したSJも自然の崇高さには感応しなかったとする桑島筆「崇高」(310-312)、SJのShakespeare評価を18世紀の天才論に重ねた濱下昌宏による「天才」(390-392)等々の項目が見られる。

【007Z1】 山田<sup>しょうじ</sup>奨治 『〈海賊版〉の思想: 18世紀英国の永久コピーライト闘争』 みすず書房 2007年12月 《viii+229+16頁》。1774年にcopyright保護期

間は有限であり作品はその後共有の文化になるという原則を英国上院から引き出した海賊出版業者Alexander Donaldson(?-1794)を発端にして著作権のあり方を考察した出版文化史的研究。SJはcopyrightが恒久化することに強く反対したが独占期間が現行の14年では短か過ぎるので100年あるいは60年間が妥当と考えていたことをJBの*Life*に読む(pp. 137-143)。他所(pp. 21-25, 64-69, 77, 79, 95, 148-149, 159-160, 171, 191, 197-199, etc.)にも、SJ/JBによる「ドナルドソン対ベケット裁判」や著作権に絡んだ人物に対する言及を*Life*から引用する。【5/3】

【007Z2】 ヘンリー・ヒッチングズ／田中京子(訳) 『ジョンソン博士の『英語辞典』:世界を定義した本の誕生』 みすず書房 2007年12月 《x+278+xxiv頁》。*Dictionary* (1755) の記述に材料を集めながら、SJの前半生についての伝記に構成する。「世界を定義した本はいかにして生まれたか。ボズウェルを補完し、伝説の辞典編纂者の真姿に迫る」(新聞広告)本書の雰囲気については、*Dictionary*の見出し語から採られABC順に建てられた洒落な章題から想像されよう。

「Adventurous: あくまで挑戦の冒険魂」(pp. 1-6) → 「Amulet: アン女王のお守り」(pp. 7-12) → 「Apple: 英知のもとにはリンゴよりペトラルカ」(pp. 13-15) → 「Bookworm: 円熟した本の虫」(pp. 16-19) → 「Commoner: オックスフォードの自費学生」(pp. 20-23) → 「Darkling: がまんと暗中模索の時」(pp. 24-31) → 「To Decamp: 機を見てロンドンへ」(pp. 32-41) → 「To Dissipate: 暗い世界の探検」(pp. 42-46) → 「English: 懸案の英語辞典」(pp. 47-53) → 「Entrance: ゴフ・スクウェアでの仕事始め」(pp. 54-60) → 「Factotum: 写学生六人の横顔」(pp. 61-65) → 「To Gather: 収集方針はまず読書」(pp. 66-74) → 「Higgledy-Piggledy: 千々に乱れる編纂作業」(pp. 75-83) → 「Lexicographer: 定義における辞典編纂者の苦悩」(pp. 84-97) → 「Library: 図書館のような辞典」(pp. 98-107) → 「Melancholy: 長びく憂鬱症」(pp. 108-120) → 「Microscope: 謎めく世界が見える顕微鏡」(pp. 121-126) → 「Network: 難解な言葉の網模様」(pp. 127-130) → 「Nicety: 美妙的な表現, 微妙な表現」(pp. 131-136) → 「To Note: 偏見に満ちた正しい英語」(pp. 137-145) → 「Opinionist: 本音が垣間見える」(pp. 146-157) → 「Opulence: 豊穡な年の楽しみ」(pp. 158-166) → 「Pastern: 名人も馬脚をあらわす」(pp. 167-175) → 「Patron: 名目だけのパトロン」(pp. 176-182) → 「Philology: もう一踏ん張りの英語史と英文法」(pp. 183-189) → 「Pleasureful: 物語あふれる辞典」(pp. 190-198) → 「To Preface: やがて悲しき序文の言葉」(pp. 199-203) → 「Publication: 世に評価を問う」(pp.

204-210) → 「Reception : 世の喝采をあびる」 (pp. 211-217) → 「Triumphant : 雷鳴轟く覇者ジョンソン」 (pp. 218-223) → 「Ubiquity : 略述本, 世界中に流布」 (pp. 224-227) → 「Variety : 流転する記述」 (pp. 228-233) → 「Weightiness : 歴代の英語辞典への影響力」 (pp. 234-245) → 「X : レントゲンを知らない時代と現代とのギャップ」 (pp. 246-251) → 「Zootomy : 労作の解剖分析で知るジョンソン像」 (pp. 252-254).

【原著】 : Henry Hitchings, *Dr. Johnson's Dictionary: The Extraordinary Story of the Book That Defined the World* (2005). 【17/】 【3/】 【参考 : 008Z2】

【007Z3】 Noriyuki HARADA [原田範行]. “Facts, Method, and Literary Creativity in Samuel Johnson’s *Life of Savage*.” *Poetica: An International Journal of Linguistic-Literary Studies*. 第68号 雄松堂 2007年12月 pp. 75-98. それ以前のSJによる6篇の小伝に較べれば, *Savage* (1744)においてSJは自らの伝記論を実践できる条件に恵まれていた. それで主題人物についてSJは細部を語りながらも常に長短両面への目配せを怠らないという, 伝記としては実験的ながら中立性と真正性を読者に印象づける手法で*Savage*の内面に迫ろうとした. そんなSJが冒頭と末尾で示した悲観に傾斜した人生観について, 作品の基調である二元論的記述とどう整合させているかについての解釈を示す. 【13/】

【007Z4】 池澤夏樹 『叡智の断片』 集英社インターナショナル 2007年12月 《221頁》. \* 『月刊PLAYBOY』の2005年1月号～2007年11月号に掲載された英語圏の名言に取材したコラムを集成した本で, 著者がその「七割くらいしか信用しない」ところのSJの言葉がpp. 48, 114, 174に見られる. 【9/】

【00811】 Isamu HAYAKAWA [早川勇]. “Obsolete Words and Meanings in Johnson’s Dictionary.” 『言語と文化』 愛知大学語学教育研究室 第18号 2008年1月 pp. 1-13. 1755年版*Dictionary*で‘Obsolete’及びそれに類する表示のある語や語義の多くが1756年の縮約版にも継承されていることから, 前者が受信・発信両用の辞書であったのに対し, 後者はShakespeareやSpenserを読むための, すなわち受信用の辞書を想定されていたであろうと結論する. 【17/】

【00821】 「片々録 : Marlies Danziger氏の特別講演会」 『英語青年』 第153巻11号 2008年2月 p. 62(710). 日本サミュエル・ジョンソン・クラブ主



催のもと, “James Boswell’s European Travels in 1764”と題して, 2007年12月1日に中央大学駿河台記念館で講演されたことの報告. 【6/1】 【4/3】

【00822】 江藤秀一 「イギリス18世紀の出版事情: ドクター・ジョンソンとその出版人」(Publishing Affairs in Eighteenth-Century Britain: Dr Johnson and His Publishers) 『シルフェ』 新潟: シルフェ英語英米文学会 第47号 2008年2月 pp. 1-12. 作家としての経歴を通してSJが関わってきた出版人を紹介するが, 1760年前後から関わり方がビジネス上の関係から友情を伴った関係に変質していたことが示唆される. 【5/3】

【00831】 原田範行 「Samuel Johnson研究の20年(1987年—2007年)」(Johnsonian Studies 1987-2007: A Survey and Prospect) 『杏林大学外国語学部紀要』 第20号(学部創設20周年記念号) 2008年3月 pp. 95-106. 200周忌(1984)に提示されていたSJ研究への視点は, 伝記的情報源とされていたJBの再検討, 作品分析に基づくSJ像の再構築, 当時の文化的背景を踏まえたSJ再評価, Johnsonianaの統合と再吟味であったとして, それらの延長線上で最近20年間の海外における研究の動向と成果とを総括し, 今後20年間への方向性を占う. 【1/2】

【00832】 Shigeru SHIBAGAKI [芝垣茂]. "Samuel Johnson Club of Japan." *Johnsonian News Letter*. Ed. Robert DeMaria, Jr. LIX: 1 (March 2008), pp. 28-30. 2007年5月20日に日本ジョンソン・クラブが20回目の会合を催したこと, 会員の近況等の報告. 【6/1】

【00833】 大森裕實 「フィロロジスト Dr ジョンソンの言語観: ascertainmentの概念に関連して」(Reconsideration of Johnson the Philologist's Attitude towards the English Language with Reference to the Concept of Ascertainment) 『愛知県立大学外国語学部紀要: 言語・文学編』 第40号 2008年3月 pp. 1-22. SJの*Dictionary*, その周辺の著述, OALDやOEDを参照して, ascertain(ment) / corruption / purifyの概念を吟味することで, SJの英語観や編纂姿勢に至ろうとする. 【17/】

【00834】 三原穂<sup>みのる</sup> 「「オシアン詩群」に対するジョンソンの反発とパーシーの共鳴」 『スコットランドの歴史と文化』 日本カレドニア学会(編) 明石書店 2008



年3月 pp. 223-247. 本書の第10章で、消滅しつつあった口承作品を想像力をもって蘇らせたとされるJames Macphersonによる一連の'Ossian'詩(1760～63)や、その影響を受けたThomas Percyによる*Reliques of Ancient English Poetry* (1765)に対して、SJは文字資料による裏付けを求める実証主義の立場を取ったこと、そして関連した言及(p. 206)など。 【10/1】

【00835】 秋月新太郎 『これならできるBOX式英文読解』 ベレ出版 2008年3月 pp. 226-234. 本書の「演習問題9」で、JohnsonにWilkesを引き合わせようとBoswellが画策した場面(Hill版ではIII:65-66)を*Life*の1776年5月の記述から引用し、構文を解説する。 【4/1】

【00836】 高橋安光(訳) 『ヴォルテール書簡集 1704-1778』 (*Voltaire's Correspondence*) 法政大学出版局 2008年3月 《口絵[4]+前付vii+1,329+索引9頁》. 書簡694(pp. 843-844)はJB宛で、1765年2月11日付の英文書簡。 【4/3】

【00841】 清水一嘉 「作者あるいは出版者の孤独と不安」 『読者の台頭と文学者：イギリス—八世紀から一九世紀へ』 清水一嘉(他編) 京都：社会思想社 2008年4月 pp. 3-56. 作家の置かれた経済的地位を長い18世紀に辿った論考の前半では法律家としてのJBの発言、後半ではSJのpatron批判が言及されている。

【00851】 江藤秀一 「ドクター・ジョンソンとジャコバイト運動」 (Dr Johnson and the Jacobite Movement) 『日本ジョンソン協会年報』 (*Annual Bulletin of the Johnson Society*) 日本ジョンソン協会 第32号 2008年5月 pp. 1-5. *Journey* (1775)においてJacobitesの反乱(1745)に言及しなかったSJの心配りについて忖度する。 【21/】

【00861】 江藤秀一 『十八世紀のスコットランド：ドクター・ジョンソンの旅行記を巡って』 開拓社 2008年6月 《vi+319頁》. 2006年に筑波大学に提出された博士(文学)学位請求論文\*「ドクター・ジョンソンの『スコットランド西方諸島への旅』と18世紀のスコットランド」(00653)を改稿して公刊した由。 【21/】 【4/2】 【5/1】 【参考：00631】

「はしがき」.....pp. iii-iv.  
HighlandsやHebridesの18世紀における歴史と文化を明らかにし、SJの主

義・主張を <i>Journey</i> (1775) に読み出すことが本書の目的であること.	
序章: ジョンソンの旅の目的とその旅行記の評判.....	pp. 1-12.
「はじめに」.....	pp. 1-5.
<i>Journey</i> を用いた SJ 研究の可能性に触れ, 本書の概要を提示する.	
「1. ジョンソンの旅の目的」.....	pp. 5-8.
貨幣経済導入の是非, 「高貴な未開人」発見, Erse 語文書の実見, 生活の実相.	
「2. 『スコットランド西方諸島への旅』の発行時の評判」.....	pp. 8-11.
【00631】のための解説から「発行時の評判」(pp. 299-302)を転載.	
注.....	pp. 11-12.
第1章: ジョンソンの旅の背景.....	pp. 13-35.
「はじめに」.....	pp. 13-14.
「1. 氏族制の世界」.....	pp. 14-26.
Highlands が Lowlands の文化と経済体制に取り込まれていく歴史を展望.	
「2. 18世紀スコットランドの道路状況と要塞」.....	pp. 26-32.
Highlands 旅行で SJ は, Jacobites 対策として整備中の軍用道路を利用した.	
注.....	pp. 33-35.
第2章: ジョンソンの旅(一): イングランド本土からスカイ島へ.....	pp. 37-81.
<i>Journey</i> の前半部分を, JB の <i>Tour to the Hebrides</i> (1785) も参照し, 二人の訪問先についての SJ の所見を織り交ぜながら辿る.	
「1. エジンバラからアバディーンへの旅」.....	pp. 37-49.
初出である【00431】を改筆したもの.	
「2. アバディーンからインヴァネスへの旅」.....	pp. 50-61.
初出とされる【00523】の pp. 27-32 を改筆したもの.	
「3. ハイランドの奥地を訪ねて」.....	pp. 62-77.
Inverness を出た一行が Scotland 北部の山岳地帯を抜けて Sky 島への渡船場 Glenelg に到達するまで.	
注.....	pp. 77-81.
第3章: ジョンソンの旅(二): ヘブリディーズ諸島から本土へ.....	pp. 83-181.
<i>Journey</i> の後半部分を, JB に加えて Thrale 夫人宛の SJ 書簡も読みながら辿る.	
「1. スカイ島とラーセイ島の旅」.....	pp. 83-125.
初出とされる【00532】の pp. 57-58, 64-66, 61-64 を本書の pp. 88-89, 115-118, 121-125 に, 同じく【00651】の pp. 104-113, 118-119 を本書の pp. 93-98, 98-99 に織り込みながら改筆したもの.	

「2. コル島の旅」.....	pp. 125-138.
Sky島からMull島へ渡る途中で嵐を避けてCol島に滞在した11日間の様子.	
「3. マル島からインヴァラリーへの旅」.....	pp. 138-155.
初出とされる【00621】に対して、写真を多く添えて、端々に肉付けを施す.	
「4. インヴァラリーから再びエジンバラへの旅」.....	pp. 155-171.
10月23日のInverary到着から11月9~20日のEdinburgh滞在、そして11月26日のLondon入りまでの比較的平穏・単調な帰路の旅を、 <i>Journey</i> やJBの <i>Tour</i> などを利用して再現させた書き下ろし.	
注.....	pp. 172-181.
第4章:『スコットランド西方諸島への旅』を巡って.....	pp. 183-269.
「1. スレイル夫人の手紙から:ジョンソンの本音と建前」.....	pp. 183-216.
Thrale宛書簡に記録された本音の所見が <i>Journey</i> でどのように脚色されたか.	
「2. ジャコバイトの乱と二人の英雄:フローラ・マクドナルドとマルコム・マクラウド」.....	pp. 216-249.
二人に会ったことがSJのJacobitesの乱に寄せる想いを推し量る鍵となる由.	
【00632】に「フローラの結婚とアメリカへの移民」を書き加える.	
「3. ジョンソンの植民地観とアメリカ人嫌い」.....	pp. 249-265.
Highlands人のアメリカへの流出を目の当たりにしたSJは、反植民地拡張主義と反アメリカ独立に傾いていった. それらについての真意をSJの政治的著作に探った【00533】を加筆したもの.	
注.....	pp. 265-269.
終章:「氏族の国からヒツジの国へ:ハイランド・クリアランス」.....	pp. 271-297.
SJの訪問時にはまだ見られたHighlands独自の制度や習慣が、その後の農地の囲い込みによって消滅していった過程を述べる.	
注.....	pp. 297-299.
「あとがき」.....	pp. 301-304.
本書が「作家としてのジョンソンの違った面を明らかにするとともに、ジョンソンの頑固一徹ぶりを改めて見せてくれる」と総括し、2004および2005年に現地を調査し風景がSJ時代とは一変しているのに驚いたことを付言する.	
参考文献.....	pp. 305-312.
索引.....	pp. 313-318.
初出一覧.....	p. [319].
【書評】:『ジェイン・オースティン研究』 第3号 日本オースティン学会 2009	

年10月 pp. 103-105(原田範行).

【00871】 Shigeru SHIBAGAKI [芝垣茂] ed. *The Samuel Johnson Club of Japan Newsletter*. No. 20 (July 2008), 7pp. 2007年12月1日に中央大学(駿河台)でMarlies Danzigerが近著*James Boswell's German and Swiss Travels, 1764* をクラブのために紹介した話の概要. また2008年5月25日に広島で第21回会合が催され, Zenji INAMURA[稲村善二]が“Johnson's View of Biography”を講じたとか, 会員の近況報告など. 【6/1】 【4/3】

【00881】 丸谷オー 「インタビュー:伝記はなぜイギリスで繁栄したか」 『考える人』 2008年夏号(第25号) 新潮社 2008年8月 pp. 28-40. 「頌徳表的, 墓碑名的な伝記から脱却して近代の伝記文学ができた, その一がボズウェル, ニがストレイチーときて, 三が探偵的方法ということになるんですよ. そういうふうに伝記文学の流れをとらえてみたい」(p. 35)との歴史観で, 英国及び日本産の注目に値する伝記作品を挙げながら, JBの*Life*の面白さを語る(pp. 33-34). 【4/1】

【00891】 トム・ガリー[Tom GALLY] 「言葉の価値 第1回:馬鹿の言葉」 『英語青年』 第154巻6号 2008年9月 pp. 40-41(352-353). 言葉を価値を数値化しようとする姿勢の例として, SJの“No man but a blockhead ever wrote, except for money.”を引いて, 「ジョンソンがカネのために書いた言葉は私には価値がないが, 無料で友人たちに話した言葉は万金に値する」との感想を添えている.

【008X1】 寺澤<sup>じゅん</sup>盾 『英語の歴史:過去から未来への物語』 中央公論新社 2008年10月 《[vii]+241頁》. SJが品詞の自由な転換(ゼロ派生)に批判的であったこと(pp. 90-91), また彼の規範的態度が英文法にも及んだとの指摘がコラム「ジョンソンの英語辞典」(p. 93)にある. 【17/】

【008Z1】 福留<sup>ひさお</sup>久大 「丸谷オーとジョンソン:フランクリンを挟んで」 『英語史研究ノート』 田島松二(他編) 開文社 2008年12月 pp. 35-44. 丸谷が『日本文学史早わかり』(1984)でFranklinによる人間の定義'a tool-making animal'をSJの言葉と誤解した理由について. そしてKarl Marxがその定義を, JBの*Life*を介してではなく, Dugald Stewartの*Lectures on Political Economy* (1855)から引用したであろうとする【986X2】の続報.

【008Z2】 大森裕實 「Henry Hitchings (2005) *Dr Johnson's Dictionary: the explanatory story of the book that defined the world*. London: U.K. John Murray., viii+278 pp.」(書評) 『JACET中部支部紀要』 名古屋：大学英語教育学会中部支部 第6号 2008年12月 pp. 63-71. 全35章から、SJが用いた6人の助手を紹介した"Factotum"章、*Dictionary*での引用方針を解説した"Library"章に注目する。【007Z2】として邦訳もある。なお米国版書名は*Defining the World: the explanatory story of Dr Johnson's Dictionary* (Picador)である由。 【17/】

【008Z3】 J. B. JONES. "The Wisdom of Samuel Johnson." 『駒沢女子大学研究紀要』 第15号 2008年12月 pp. 65-74. 現代人に適用しそうな道德的知恵を、SJの*Sermons* (1788-89)と一連の随筆とから引用しコメント。 【9/】

【00911】 原田範行 「書誌学と文学研究のテキスト学的融合のかたち：イギリス一八世紀文学を中心に」 『テキストと人文学：知の土台を解剖する』 齋藤晃(編) 京都：人文書院 2009年1月 pp. 21-35. 書誌学を文学研究に活かして得られるであろう成果を2件例証するうちに、*Rasselas*初版における頁あたりの行数の乱れに着目しての知見が示されている。 【18/】 【参考：00231, 00255】

【00912】 ピーター・ミルワード [Peter MILWARD]/橋本修一(訳) 「Samuel Johnson：辞書の理想」 『ミルワード氏の英文学散歩：ルネッサンスから現代へ』 春風社 2009年1月 pp. 59-63. *Dictionary*の「前書き」を、英文学における韻文から散文への転換点を象徴するという意味で、SJの最良のエッセイの一つとする。その他数ヶ所にSJ/JBへの言及が見られる。 【17/】

【00913】 多胡吉郎 『英国名言に生きる』 PHPパブリッシング 2009年1月《239頁》。現代のSohoに蘇って呆然とするSJを想像した「5. ロンドンに飽きた人は…」(pp. 32-35). 有名な"Patron"の定義の背景には私憤を超えた深い人生への観照があったとする「9. パトロンとは…」(pp. 50-53). Scotland人を当惑させようとSJが示した"Oats"の定義を逆手に取った「10. ゆえにイングランドでは馬が優秀にして、スコットランドでは人が優秀である」(pp. 54-57)を含む。 【9/】

【00931】 原田範行 「ブラックフライアーズ・ブリッジにかけた夢：十八世紀イギリスにおける歴史認識と生活感覚、そして文書文化の諸ジャンル」 『中世主



義を超えて: イギリス中世の発明と受容』 松田隆美(他編著) 慶應義塾大学出版会  
2009年3月 pp. 213-239. 本書の第8章をなし, Blackfriars Bridgeのデザイン  
が公募された際, SJが唱えた主張には歴史的視点が機能していたように, 18世紀  
人の歴史認識は, 中世的郷愁を超え, 生活感覚を織り込みながら文学や伝記ジャン  
ルをも融合していった. 【11/】

【00932】 中川忠(訳) 『サミュエル・ジョンソン 詩人伝: アディソン, ゲイ,  
グレイ 付ジョン・ドライデン マック・フレックノウ』 私家版(80部) 2009年3  
月 《156頁》. Hill版の*Lives*(1905)を底本とし, Lonsdale版(2006)も参照し  
ながらの邦訳で, すべてが初訳. 【22/】

「アディソン伝」.....pp. 1-95.  
「ゲイ伝」.....pp. 96-114.  
「グレイ伝」.....pp. 115-135.

【00933】 Shigeru SHIBAGAKI [芝垣茂]. "Samuel Johnson Club of Japan."  
*Johnsonian News Letter*. Ed. Robert DeMaria, Jr. LX: 1 (March 2009), pp.  
30-33. 2008年5月25日に日本ジョンソン・クラブが21回目の会合を催した  
こと, および会員の近況等の報告. 【6/1】

【00934】 Noriyuki HARADA [原田 範 行]. "Morphology of Books and  
Language: Writing, Reading, and Anthologizing in Eighteenth-Century Britain  
and Modern Japan." 『杏林大学外国語学部紀要』 第21号 2009年3月 pp.  
101-115. 現代社会が成立した背景には, 18世紀英国における"orality"から  
"print culture"への転換があったとする. そうしたなかで, SJの*Dictionary*が正書法  
との関わりで, *Lives*が読者および正典の形成へ貢献した作品として, *Rasselas*が作  
家vs書店の軋轢の例としてばかりでなく, その翻訳と印刷が19世紀日本での言文一  
致を促した例として, それぞれ言及されている. 【10/5】

【00935】 向井秀忠 「ファニー・バーニーの書簡に見るサミュエル・ジョンソ  
ン」(Samuel Johnson in the Journals of Fanny Burney) 『言語文化研究』 松山  
大学 第28巻2号 2009年3月 pp. 215-235. Frances BurneyよりSJ以外に  
宛てられた書簡から, SJが言及されている1791年9月から1839年2月に至る約30  
箇所をJoyce Hemlow編*The Journals and Letters of Fanny Burney* (1972-84)に  
拠って抜き書きする. 【5/2】

【00941】 武内信一 「英語辞書の発達：ジョンソンからマレーへ」 『英語文化史を知るための15章』 研究社 2009年4月 pp. 179-195. 本書の第14章のことで、序(第I節), *The Plan of a Dictionary of the English Language* (1747)の概要(II), *Dictionary*完成までの経緯(III), *Dictionary*の評価(IV), 100年後に起こった新辞典(OED)への機運(V)のそれぞれについて、*Life*にも触れながら語る。第14章前後にも、*Le Morte D'Arthur* 評(p. 138)など、SJへの言及が見られる。 【17/】

【00942】 <sup>おさだ</sup>長田弘 「『サミュエル・ジョンソン伝』」 『文藝春秋Special』 季刊春号(第8号) 文藝春秋 2009年4月 pp. 144-146. 中学いらい記憶にあったSJのエピソードについて、中野好之訳を読んでいて典拠に巡り会えた。 【4/1】

【00943】 出口保夫(他編) 『21世紀イギリス文化を知る事典』 東京書籍 2009年4月 《8+830頁》. 「人名索引」(pp. 800-810)で参照すると、SJの路地裏への関心(p. 128), *Dictionary*(p. 158), 彼のRomanticism的傾向(p. 192), 「恥知らずなまでの紅茶飲み」(p. 484)など、短い言及が12カ所に見られる。

【00944】 小林章夫 「ボズウェル」 『新カトリック大事典 第4巻：ハク〜ワン』 其編纂委員会 研究社 2009年4月 p. 668. 長老派教会を信奉したことと、彼の伝記文学への貢献に触れた、原稿用紙1枚の項目。

【00951】 「サミュエル・ジョンソンの『詩人伝』を読む：侵犯する伝記的/批評的ナラティヴ」 『日本ジョンソン協会年報』 (*Annual Bulletin of the Johnson Society*) 日本ジョンソン協会 第33号 2009年5月 pp. 38-42. 2008年5月26日に広島で開催された第41回大会におけるシンポジウムを報告した記事で、発表者と題目は次の通りであった。 【22/】

司会者として*Lives*執筆に伴うSJの試行錯誤を検証するよう提起した原田範行は、「サミュエル・ジョンソンの『詩人伝』を読む：侵犯する伝記的/批評的ナラティヴ」(pp. 38-39)において、各講師がSJらしい批評姿勢の確認に至れたと報告する。 【参考：01051】

<sup>やがわ</sup>箭川修は「『ミルトン伝』を読む：「公平な批評の役目」とは？」(pp. 39-40)で、『失楽園』とSJの巨大さが共に重カレンズとなって周辺を歪曲化していると指摘。大西洋一の「『ドライデン伝』を読む：ジョンソンの「反演劇的偏見」」(p. 40)は、

Drydenが生活のため劇作に才能を浪費したとSJは憂えたが、だからこそ才能を発揮し得た逆説をもSJは認識したとする。

西山徹の「『スウィフト伝』を読む：詩人になりそこなった男の生涯」(p. 41)は、先行諸資料を取捨選択した際に、SJはSwiftの人生の苦悩に注目したとする。

福本<sup>ただゆき</sup>宰之の「『ポープ伝』を読む：ジョンソンによる新たな功績について」(pp. 41-42)は、文筆での成功を画策したPopeのしたたかさを暴いたことが、SJの功績であったとする。 【参考：01052】

【00961】 江藤秀一「ジェイムズ・ボズウェル：伝記とともに生き続ける作家」『文学都市エディンバラ：ゆかりの文学者たち』 木村正俊(編) 千葉：あるば書房 2009年6月 pp. 43-63. 本書の第2章として、編年体的JB伝になっており、それが*Life*の活写するJS像の提示をもって締め括られる。また木村筆の序章にはOld TownにおけるJB(pp. 7-8)が、米山優子筆の第3章でもSJに対するRobert Ferguson(1750-74)の反発(pp. 66-67)などが言及されている。 【4/1】

【00962】 黒川敬三 「辞典：終わりなき探求」 『イギリス文化：55のキーワード』 木下卓(他編) 京都：ミネルヴァ書房 2009年6月 pp. 152-155. 第35のキーワードで、辞書史概観の中間部でSJの*Dictionary*を解説している。 【17/】  
【書評】：『英語教育』 大修館書店 2009年11月 pp. 94-95 (小泉朝子)。

【00971】 原田範行 「『ポケット版18世紀英国旅行便覧』解説」 京都：ユーリカ・プレス(Eureka Press) 2009年[7月] 《34頁》. Noriyuki HARADAが編集・復刻した*The British Tourists; or Traveller's Pocket Companion, through England, Wales, Scotland, and Ireland. Comprehending the Most Celebrated Tours in the British Islands. Edited by William Mavor, 6 vols. (1800)*に添えられた別冊の日本語版解説。旅行の功罪に対するSJの意見の揺れに18世紀特有の時代性を重ねながら、1773年のScotland旅行が実現させた*Journey*(1775)の特質に注目し、その転載に際してMavorが加えた改変についても指摘している。英語にした解説も"Introduction"として本体(vol. 1, pp. v-xxv)に綴じ込まれている。 【21/】

【00981】 諏訪部仁 『ジョンソンとボズウェル：事実の周辺』(*Samuel Johnson and James Boswell: Facts or Thereabouts*) 中央大学出版部 2009年8月(学術図書73) 《XXIV+193頁+英文60pp.》. 英文論考は巻末から新たに頁付けさ

れている。

「はしがきに代えて」.....pp. I-XIV.

SJの抱かせる親近感が著者をSJ研究へ向わせたことと、収録論文が執筆された背景とを語る。 【11/10】

目次・初出一覧.....pp. XVIII-XXIV.

「スコットランドの旅: ジョンソンとボズウェル」.....pp. 1-61.

SJとJBによる1773年のScotland旅行を、詳註を施しながら辿った解説文。

【初出: 97411】 pp. 1-25. 【98831】 【21/】

「ジャコバイト・ジョンソン: 四五年出陣説再考」.....pp. 63-84.

Jacobitesによる1745年の反乱にSJが加担したかについて。 【初出: 984Y2】 【20/】

「ジョンソンとスコットランド」.....pp. 85-86.

SJはScotlandを嫌っていなかったとする。 【初出: 99739】 【11/】

「ジョンソンと酒」.....pp. 87-89.

酒好きのSJの禁欲的態度に彼のモラリスト的側面を見る。1974年に「日本ジョンソン協会」で発表した際の資料をもとに書き下ろした文章。 【11/10】

【参考: 974X2】

「大槻文彦とサミュエル・ジョンソン」.....pp. 91-96.

『言海』(1891)と*Dictionary*の類似性など。 【初出: 994Z5】 【10/4】

『サヴェジ伝』.....pp. 97-104.

訳書【97551】に添えられた解説文。 【13/】

「ジョンソン博士の無知」.....pp. 105-106.

辞書のSJは知ったかぶりをしなかった。 【初出: 00761】 【11/10】

「学者の特質と義務について(翻訳)」.....pp. 107-108.

SJ終焉の家に死後直ちに入居した聖職者John MoirがSJ筆として後世に伝えた短文を訳出。 【11/9】

「ジョンソンの召使い: フランシス・バーバー」.....pp. 109-113.

Francis (Frank) Barber (c. 1742-1801)の小伝で、A. T. Wallachの小説*Women's Work* (1981)にヒントを得て執筆された由。 【初出: 99051】

【5/3】 【参考: 98325】

「敬虔なペテン師たち」.....pp. 115-122.

George Psalmanazar (1679?-63)をSJは尊敬していた。 【初出: 99821】

【5/3】

- 「英雄になりそこなった王子」.....pp. 123-130.  
1745年の反乱に失敗し敗走した Charles Edward Stuart について. SJ 論というわけではない. 【初出】:『白門』中央大学通信教育部 第48巻11号 1996年11月 pp. 34-39.
- 「三つの「自伝」:ジョンソン・ボズウェル・ヒューム」.....pp. 131-146.  
1772年頃の SJ と, 1764年の JB と Rousseau との出会いについて.  
【初出: 00571】 【24/】 【4/3】
- 「さまよえるスコットランド人:ボズウェル私論」.....pp. 147-165.  
JB は, 日々を記録する執念に捕われていたので, 結果として *Life* を書くことになった. 【初出: 98972】 【4/1】
- 「英文学の中の日本人」.....pp. 167-175.  
日本人登場の例を英文学作品に拾ったもの. SJ への言及(p. 169)も見られるが, SJ 論というわけではない. 【初出】:『白門』中央大学通信教育部 第53巻3号 2001年3月 pp. 26-31.
- 「傍聴生夏目金之助:漱石とUCL」.....pp. 177-193.  
漱石と彼の留学先 London 大学 University College との接点と辿る. 気質的類似(p. 191)その他で SJ への言及(p. 185)も見られるが, SJ 論というわけではない. 【初出】:『人文研紀要』中央大学人文科学研究所 第48号 2003年10月 pp. 123-138.
- "Boswell's Meetings with Johnson, A New Account".....pp. 1-13.  
JBがSJに会った日数を400日と算出する. 【初出: 99551】 【4/3】
- "A Trio in the Age of Transition: Johnson, Boswell and Hume".....pp. 15-25.  
「義務」と「死」に対するSJとDavid Hume(1711-76)の姿勢の違いを, JBの記述に拠って対比する. 【初出: 986&1】 【10/4】
- "On Samuel Johnson's Definition of 'Oats'".....pp. 27-31.  
*Dictionary*における有名な'Oats'の定義はSJのオリジナルでなかった.  
【初出: 97821】 【17/】
- "A Note on Johnson's *Preface to Shakespeare*".....pp. 33-39.  
SJのShakespeare批評における'Species'の概念. 【初出: 98591】 【19/】
- "Boswell's Dictionary".....pp. 41-46.  
JBがScotland語辞書の執筆を準備していた. 【初出: 99591】 【4/3】
- "Boswell in the Inner Temple".....pp. 47-58.  
法廷弁護士のEnglandでの資格取得のため, JBが法学院での会食に規定回数出



席していたことを確かめる。 【初出：004X1】 【4/3】

"Dr. David".....pp. 59-60.

1994年に死去したJohn David Fleemanに捧げられた追悼文。 【初出：  
994Z1】 【6/1】

【参考】：上坪正徳 「諏訪部仁先生を送る」 『英語英米文学』 中央大学英米文学会 第50集 2010年3月 pp. 235-239.

【00991】 Shigeru SHIBAGAKI [芝垣茂] ed. *The Samuel Johnson Club of Japan Newsletter*. No. 21(September 2009) 《6pp.》. 2009年5月31日に東京で日本ジョンソン・クラブの第22回会合が開催され、その席でYasuo ICHIKAWA[市川泰男]が講じた“On Johnson’s English in *The Journal of A Tour To The Hebrides* by James Boswell”の概要と会員の近況報告など。 【4/2】  
【6/1】

【00992】 Greg CLINGHAM. "A Johnsonian in Japan." *Johnsonian News Letter*. Ed. Robert DeMaria, Jr. LX: 2 (September 2009), pp. 37-40. 2009年に訪日した*Samuel Johnson after 300 Years* (2009)の編者が、日本ジョンソン協会や日本ジョンソン・クラブの活動状況を聞いてきた報告記事。 【6/1】

【00993】 定松正, 蛭川久康(編著) 『風土記イギリス：自然と文化の諸相』 新人物往来社 2009年9月 《327頁》. 蛭川が紹介するジョンソン博士記念館(p. 101)と「ジョンソン博士のスコットランド周遊の旅」(pp. 269-270). 【21/】

【009X1】 水田洋 『アダム・スミス論集：国際的研究状況のなかで』 京都：ミネルヴァ書房 2009年10月 《ix+499+9頁》. アメリカの独立をめぐるJBとHugh Blair間の論争を*Boswell in Extremes 1776-1778* (1971)に読み(pp. 306-307, 322-323), 商業が英語を損うとSJが見ていたこと(pp. 250-251, 269)などに触れている。 【4/3】

【009Y1】 江藤秀一, 芝垣茂, 諏訪部仁(編著) 『英国文化の巨人：サミュエル・ジョンソン』 横浜：港の人 2009年11月 《口絵1+331頁》. SJと彼の周辺に対する日本の読書界における認知度を高めるため, 「日本ジョンソン・クラブ」の会員が分担して執筆したSJについての概説書で, 章分けと執筆者名は以下の通り.

「はじめに」(江藤秀一).....pp. 3-5.

創立20周年を迎えた「日本ジョンソン・クラブ」がSJ生誕300年のタイミングに合わせて本書を産み出すに至った経緯.

## 第一章：ジョンソンの時代と生涯

「第一節：一八世紀の英国」(永嶋大典).....pp. 13-22.

長い18世紀における政治, 文学, 芸術, 科学, 娯楽の状況.

「第二節：ジョンソンの生涯」(永嶋大典).....pp. 23-48.

エピソードを織り交ぜ, 作品を追いながら, 編年体で綴ったSJの伝記で, 本書の総論的記述になっている. 【3/】

「第三節：旅人ジョンソン」(市川泰男).....pp. 49-62.

SJの人間的魅力を窺わせる会話や逸話を, 邦訳が進行中のJB著 *Tour to the Hebrides* (1785)に拾い読みする. 【10/3】 【4/2】 【参考: 01031】

「第四節：本屋の息子：罪とつぐないを超えて」(中原章雄).....pp. 63-78.

Hawthorneに *Biographical Stories* (1842)を書かせた親不孝話から説き起こし, 出版人Michaelに対する息子SJの再認識に迫る. 【3/】 【9/】

## 第二章：ジョンソンの伝記を書いた人たち

「第一節：ジョンソンの名を不滅にしたジェイムズ・ボズウェル」(渋谷章).....

.....pp. 81-88.

1763年にSJの面識を得るまでのJBを, 主にScotlandでの生活と人間関係において描く. 【4/3】

「第二節：それからのボズウェル」(諏訪部仁).....pp. 89-96.

1763年以降のJBの生き様と, 公私にわたる彼の文筆上の業績を紹介する.

【4/1】 【4/2】 【4/3】

「第三節：サー・ジョン・ホーキンス：もう一人のジョンソン伝作家」(藤井哲).....

.....pp. 97-110.

SJとは半世紀の友人が纏めたSJ伝の独自性と, Hawkinsの評価史. 【5/3】

【参考: 00235】

## 第三章：ジョンソンとその仲間たち

「第一節：愛すべきアイルランドの文豪：オリヴァー・ゴールドスミス」(諏訪部仁).....pp. 113-122.

1756年頃からの十数年の交遊であったが, SJはGoldsmithの作家としての才能に深い敬意を抱いていたとする. 【5/3】

「第二節：リチャード・サヴェジ：リチャード・サヴェジと『サヴェジ伝』」(稲

- 村善二) .....pp. 123-137.  
前半にRichard Savageの小伝を据え、後半で*Savage* (1744)にSJの人生観と人間性への洞察が読み取れるとの解釈を示す。 【13/】
- 「第三節：ジョンソンとサー・ジョシュア・レノルズ：ジョンソンと美術界とのかかわり」(斎藤信平) .....pp. 138-147.  
SJがJoshua Reynoldsに及ぼした影響力を踏まえて、同時代人の観測とは異なって、SJが絵画芸術の理解者であったと見る。 【11/】
- 「第四節：芸術一家との交流：バーニー家とジョンソン」(向井秀忠).....  
.....pp. 148-151.  
SJと、父Charles及び娘Fanny Burney親子との接点に注目する。 【5/2】
- 「第五節：ジョンソン家の居候たち」(稲村善二).....pp. 152-160.  
1752年頃からAnna Williams, Frank Barber, Robert Levet, Elizabeth Desmoulins, Poll Carmichaelを引き取るようになっていたSJ自身も、1765年以降にHenry Thrale家の客分になっていった。 【5/3】
- 「第六節：ジョンソンいこいの場：スレイル夫妻」(横手長治).....pp. 161-170.  
SJにとっての安楽な生活環境を1765年以降に提供したThrale家の貢献を、Hester Thraleを軸にして解き明す。 【5/1】
- 第四章：ジョンソンとその作品
- 「第一節：ジョンソンの模倣詩：『ロンドン』と『人間願望のはかなさ』」(芝垣茂) .....pp. 173-191.  
JBによる*Life*を手掛かりにして*London* (1738)と*Vanity* (1749)へのSJの取り組み様を、またJuvenalisの原詩との差違にSJのメッセージを読む。 【14/】
- 「第二節：『ラセラス』：時代を越えて読み継がれる珠玉の書」(中村賢一).....  
.....pp. 192-203.  
Viktor Emil Franklが提唱した「自己超越性」に照らして解釈する手法で、主人公Rasselasが幸福を探求する姿勢の問題点を浮き彫りにする。 【18/】
- 「第三節：ジョンソンと演劇」(原田範行).....pp. 204-211.  
*Irene* (1749)の長短を指摘してから、上演での挫折がSJを散文に向わせ、それが英国批評文学の発展に寄与することになったと見る。 【15/】
- 「第四節：ジョンソンと批評」(原田範行).....pp. 212-225.  
伝記的批評、本文校訂を伴う文芸批評、政治・社会批評におけるSJのスタンスを概略する。 【10/1】 【10/2】 【20/】
- 「第五節：幸福と平和を求めて：随筆家としてのジョンソン」(江藤秀一).....

.....pp. 226-240.

定期刊行物掲載の随筆類にはjournalistとしてのSJの論調を, 政治論冊子類には国策に対する彼のスタンスを, *Journey* (1775)にはScotlandでのSJの見聞の意義を読み出す. 【16/】 【20/】 【21/】

#### 第五章: ジョンソンの『英語辞典』をめぐって

「第一節:『英語辞典』」(永嶋大典).....pp. 243-260.

SJ版の特質を具体的に提示し, 17世紀の難語辞典から20世紀のOEDに至る辞書史的パースペクティブで, 彼の功績を評価する. 【17/】

「第二節:英語学者ジョンソンの言語観」(大森裕實).....pp. 261-275.

Swiftの『英語を矯正・改良・確定するための提案書』を援用しながら, SJの言語観を*Dictionary*の『趣意書』や『序文』に読み取ろうとする. 【17/】

「第三節:明治期に於けるジョンソンの英語辞典の位置づけ」(佐野摩美).....

.....pp. 276-287.

明治の日本では*Webster*の1864年版が普及し利用されたが, 藤岡勝二や大槻文彦の言説にSJ版*Dictionary*の間接的影響が見られたとする. 【17/】

「第六章:日本でのジョンソン受容と研究の歴史」(藤井哲).....pp. 289-311.

明治以来のSJ関連の単行書や邦訳書を紹介しながら, 研究動向の流れも歴史的に展望する. 【1/2】 【参考: 006Y2】

「サミュエル・ジョンソン年表」.....pp. 312-314.

「あとがき」(編者一同).....pp. 316-317.

専門知識なしで読める啓蒙書たることを標榜する.

「参考文献」.....pp. 321-318.

章単位で, 最小限必要な書名をリストにしたもの.

「索引」.....pp. 330-322.

本文では人名や書名が日本語で表記されているので, 人名・書名索引では, あいうえお順に配列されているが, それぞれに原綴りが併記されている.

「執筆者紹介」.....p. [331].

16名の執筆者全員が「日本ジョンソン・クラブ」の会員であると紹介.

【書評】:「MSN産経ニュース」産経新聞社 2009年11月22日.『図書新聞』第2947号 図書新聞 2009年12月26日 p. 5(巽孝之).『英語教育』大修館書店 2010年2月 p. 98(及川賢).『月刊みすず』1-2月合併号(第52巻1号通巻579号)みすず書房 2010年2月 p. 69(宮下啓三).『週刊読書人』第2824号 読書人 2010年2月5日 p. 5(やがわ 箭川修). \*『季刊銀花』2010年3月号(通巻161号)文化出版局.

【009Y2】 川戸道昭, 榊原貴教(編著) 『図説翻訳文学総合事典第1巻: 図録日本の翻訳文学・図説日本翻訳文学史』 大空社/ナダ出版センター 2009年11月 《図録32+図説371頁》. 川戸執筆執筆のコラム「『ラセラス』流行の背景: 上田敏の証言」(p. 141)は, 明治期の「英語副読本・人気ベスト10」(p. 139)で340点ちゅう第3位(14点発行)に付けていた教養主義的教材*Rasselas*に触れて, 実用主義への傾斜を強めていた当時の英語教育の危うさを上田が危惧していたことを紹介する. また「あとがき」(pp. 353-355)では, 川戸が*Rasselas*を切っ掛けにして日本における西洋文学受容の研究に入ったと述懐する. 【18/】 【参考】: 【90561】『定本上田敏全集第九巻』 教育出版センター 1979; 1981; 1985 pp. 321-324.

【009Z1】 サミュエル・ジョンソン/原田範行(他訳) 『イギリス詩人伝』 筑摩書房 2009年12月 《544+xii頁》. 筑摩書房の「新刊案内」には, 「生誕300年に贈る畢生の大作! 主著であり評伝文学の嚆矢として盛名を馳せながら, 長らく邦訳で読む機会に恵まれなかった本書. ジョンソン博士という強烈な個性が捉えた17-18世紀イギリス詩人群像」とある. 原著に全52篇あるうち, 「『詩人伝』の全貌をうかがう上で不可欠な人物, 詩人としてもメジャーな人間, そして17世紀から18世紀までのイギリス詩の変化を辿る上で重要な存在」(p. 543)と判断される6篇に, 「ジョンソンとの交友関係, 伝記としての出来栄え」(同所)を示す伝記として「リチャード・サヴェッジ」を加えて, Hill版*Lives* (1905)を底本にLonsdale版(2006)の注釈を参照しながら邦訳した7篇. そのうち前半3篇が1779年刊行分から, 残り4篇が1781年刊行分からで, 原著の総頁数の55%を訳出したことになる. 【22/】

「凡例」.....pp. 3-6.

訳出方針と, 原著に伝記が収録されている52詩人の姓名と生没年のリスト.

「エイブラハム・カウリー」(原田範行訳).....pp. 7-70.

訳者による「解説」(pp. 66-70)は, "Cowley"が*Lives*冒頭に置かれた背景を述べ, SJが形而上詩人論を盛り込んだことで 伝記 / 人となり / 評価 という三部構成が各篇に踏襲される契機になったとする. そしてSJが形而上派詩人のうちでもAbraham Cowley(1618-67)に注目した理由を3点を挙げている. 本邦初訳.

「ジョン・ミルトン」(圓月勝博<sup>えんげつ</sup>訳).....pp. 71-145.

「解説」(pp. 141-145)によると, 国民的詩人として一世紀にわたって研究が蓄積され過度に理想化されてきたJohn Milton(1608-74)に対し, 文学面で



は評価しながらも思想面では嫌悪したSJが偶像破壊を試みていて陥ったジレンマが本篇における文学的醍醐味であるらしい。 【参考：97461】

「ジョン・ドライデン」(武田将明訳).....pp. 147-261.

John Dryden(1631-1700)を「聖俗あわせ持ったひとりの人間として想像可能な姿で描き出した」本篇は、事実誤認も少なくないが、自己流の作品選別とユーモア溢れる独断的論評が読者を詩の鑑賞へ招く格好の入門書になっていると、訳者は「解説」(pp. 257-261)で評している。 【参考：00671】

「リチャード・サヴェッジ」(仙葉豊訳).....pp. 263-342.

「解説」(pp. 339-342)によれば、*Savage* (1744)ではエピソードを重ねる構成が伝記というより小説的な効果を上げていたが、「テキストの修正や作品の引用や注が削除され…おおむね最初のかたち」で*Lives*に編入されたのは、Richard Savage(1697?-1743)という「生きることの下手だった人物に、ジョンソンは自分でもどうしようもない哀惜の念を抱いた」からであった。肖像画(p. 263)は苦心の探索の賜物(p. 543)。 【参考：97511, 97551】

「アレグザンダー・ポープ」(小林章夫訳).....pp. 343-473.

本篇が52篇ちゅう最後に執筆され最長の伝記になったのは、「解説」(pp. 470-473)によると、SJのAlexander Pope (1688-1744)に対する高評価の現れであり、*An Essay on Criticism* (1711)や*Iliad*の訳業(1715-20)など初期作品の取り上げ方に、SJの好意的傾斜が認められるとのこと。Popeの主要作品リスト(pp. 467-469)も添えられている。 【参考：99221】

「ジョナサン・スウィフト」(渡邊孔二訳).....pp. 475-518.

相当部分をJohn Hawkesworth筆の伝記(1755)に拠りながらも、SJの筆が反Swiftに振れた背景として、「解説」(pp. 515-518)は三つの要因を指摘し、Jonathan Swift(1667-1745)とは似るところが多かったSJだからこそその相反感情的屈折が秘められていた考える。 【参考：005Y3】

「トマス・グレイ」(吉野由利訳).....pp. 519-534.

Thomas Gray(1716-71)の生き様の方が作品より遙かに面白いと考えていたSJは、虚飾的人間性が過剰な詩的表現をもたらせたといったような辛口のGray評価を示して物議を醸したが、僅かに*Elegy* (1751)にだけは「一般読者の視点まで降りてくることにより、ようやくグレイの貢献を認めることに妥協している」と、「解説」(pp. 532-534)にある。 【参考：00932】

「サミュエル・ジョンソンおよび『イギリス詩人伝』について」(小林章夫).....

.....pp. 535-544.

主要作品を辿りながらのSJ略歴(pp. 535-537)に続いて, SJが*The Works of the English Poets*全56巻へ序文執筆を依頼された背景的事情から, 執筆の進捗に伴う別立ての*Prefaces Biographical and Critical*全10巻の成立への経緯(pp. 537-540)を述べ, SJへの協力者たちや彼が参照した資料を並べる(pp. 540-541). そしてイングランドの文運隆盛を内外に示して国威を発揚しようとする版元の思惑に照らして異質な"Savage"が編入された背景(pp. 542-543), および翻訳書成立への事情(pp. 543-544)が語られている.

「人名著作索引」.....pp. i-xii.  
「訳者略歴」.....p. [i].

【009Z2】 「シンポジウム要旨：サミュエル・ジョンソン：その多彩なる世界」  
*Soundings Newsletter* サウンディングズ英語英米文学会 第60号 2009年12月 pp. 5-8. 2009年10月3日に上智大学で催された第60回大会のこの報告によれば, 発表者と題目は次の通りであった. 【参考：01091】

すなわち, 三好楠二郎の「ジョンソンの用例について：語学観と文学観の関連から」(pp. 5-6)は, SJの記述意識が頻用動詞の用例に, 規範意識が前置詞の用例に, それぞれ反映されたとする. 【17/】

中島渉の「愛国心(Patriotism)とジョンソンの政治観」(pp. 6-7)は, SJがTory寄りであるとされる背景を考察する. 【20/】 【参考：01012】

また, 浦口理麻の「ジョンソンとスコットランド」(p. 7)は, 執筆意図という視点から*Journey* (1775)に迫ろうとした. 【21/】

そして, 池田真の「ジョンソン英文典におけるsyntaxの扱いとその先見性(p. 8)」は, 単語の語法に統語論を織り込んだSJに先取性を認めるものであった. 【17/】

【01011】 原田範行 「サミュエル・ジョンソン生誕300年：18世紀イギリス文豪の近さ」 『Web英語青年』 第155巻10号 2010年1月 pp. 5-7. 2009年の海外の学会では, SJを神格化しないで論ずる姿勢が目立ち, 日本人のSJ指向も注目されていた由. 【6/1】

【01012】 中島渉 「18世紀英国の愛国心とサミュエル・ジョンソンの政治観」 (Eighteenth-Century British Patriotism and Samuel Johnson's Political Views) 『教養論集』 明治大学 第451号 2010年1月 pp. 139-156. SJ当時の政界の勢力状況を略述してから, *Patriot* (1774)に込められたSJのメッセージを読み出し, それがBolingbroke子爵が*The Idea of a Patriot King* (1749)で唱えていた

「制限君主制」と重なると指摘し、SJを「野党的保守政論家」と規定する。 【20/】  
【再録】：加筆して【01091】

【01013】 Isamu HAYAKAWA [早川 勇] “Johnson's Dictionary and the Philosophy of Language in the Eighteenth Century” 『言語と文化』 愛知大学語学教育研究室 第22号(通巻第49号) 2010年1月 pp. 157-170. 18世紀の英国啓蒙主義という広い視野でSJの言語観を捉えてこそ彼の*Dictionary*を理解できるとの立場から、たとえ直接的言及はなくても、関連性を示唆する文法書や言語学書、雑誌記事、直接・間接に*Dictionary*を評価した文書など133件を、関連箇所を抜粋・集積するための準備作業として、時系列に沿ってリスト化したもの。 【17/】

【01021】 早川 勇 「ジョンソンの辞書誕生の周辺(その1)」(The Emergence of Johnson's Dictionary, Part I) 『文学論叢』 愛知大学文学会 第141輯 2010年2月 pp. 110(1)-88(23). 書籍商Robert Dodsley, 6人の助手たち, Chesterfield伯爵を絡めながら, *Dictionary*の編纂手順を辿り, その辞書史的意義を語る。 【17/】

【01031】 ジェイムズ・ボズウェル/諏訪部仁, 市川泰男, 江藤秀一, 芝垣茂, 稲村善二, 福島治(共訳) 『ヘブリディーズ諸島旅日記』 中央大学出版部 2010年3月(人文科学研究所翻訳叢書2) 《xvii+522+索引39頁》. JBの*Tour to the Hebrides* (1785)を, Yale版(1961)を参照しながらChapman版(1924)で全訳。 【4/2】 【参考: 00631】

【01032】 江藤秀一 「ドクター・ジョンソンとアイルランド: ジョンソンはなぜアイルランド人に好意的であったのか」(Dr Johnson and Ireland: Why Did He Have a Kindness for the Irish Nation?) 『人文研紀要』 中央大学人文科学研究所 第67号(創立30周年記念号 I) 2010年3月 pp. 95-109. Englandにより植民地化されてきたIrelandに寄せるSJの同情を*Life*と*Political Writings* (1977)に読み出し, その背景に彼の親カトリック的姿勢と強い慈善心とを見出す。 【20/】

【01033】 笹川 浩 「対立と調和: ジョン・デナムの『クーパーの丘』について」『伝統と変革: 一七世紀英国の詩泉をさぐる』 中央大学人文科学研究所(編) 中央大学出版部 2010年3月(研究叢書47) pp. 209-374. 長大なる本書の第6章

は、SJが*Lives*ちゅうの"Denham"で下した地誌詩(local poetry)の定義を援用(pp. 218-219)することから、そして英詩の韻律法に対するJohn Denham(1615-69)の功績に言及(pp. 211-212)することをもって書き起こされ、結び近くで彼の限界を指摘するSJに言及(p. 350)されている。 【22/】 【参考：00435】

【01034】 大野舞子 「サミュエル・ジョンソンの『辞書』の歴史的意義と問題点：現代辞書への貢献とその再評価」(Historical Significance and Problems of Samuel Johnson's *Dictionary*: Its Contribution and Reassessment to Modern Dictionaries) 『英米文学』 立教大学文学部英米文学専修 第70号 2010年3月 pp. 55-77 & 78-79(synopsis). SJ版以前を辞書史的に展望し、項目"come"を通してSJ版の特徴を指摘し、現代の英和辞典とも対照させた、学士論文。 【17/】

【01035】 田島松二，末松信子(編) 「18世紀英語研究書誌(増補版)」(A Bibliography of Writings on Eighteenth-Century English (Revised and Enlarged)) 『別府大学大学院紀要』 別府大学学術研究委員会 第12号 2010年3月 pp. 65-95. この20年で分析と記述とが欧州を中心に活発化している18世紀英語に特化して、両編者によって2003年くらい何度か発表されてきた国内外の研究成果の書誌の最新版。但し「文法史」と「辞書史」に関する文献を収集対象から除外しているために、SJが含まれたタイトルは多くない。 【17/】

【01041】 大塚勝弘 『あの人はこの家に住んでいた：偉人たちのロンドン図鑑：ブルー・プラークの楽しみ方』 新人物往来社 2010年4月 《199頁》. 「サミュエル・ジョンソン」の節(pp. 52-55)および口絵写真(p. [6])が、Gough Squareの家と、Johnson's Courtの住居跡について簡単に紹介している。 【6/1】

【01051】 原田範行 「英文学史誕生の皮肉：自伝としてのジョンソンの『英国詩人伝』」(Samuel Johnson's *Lives of the English Poets* as an Autobiography: A Paradox of the Birth of the English Literary History) 『十八世紀イギリス文学研究 第4号：交渉する文化と言語』 日本ジョンソン協会(編) 開拓社 2010年5月 pp. 142-158 & 400-401(synopsis). 刊行当初から批評家・読者は*Lives*に道徳的・精神的規範性を読み取り、それを「英文学史」的作品と位置付けてきたが、当のSJは、詩人たちを突き放してアンチ・ヒーロー化することで、自らの文人としての立ち位置を確認しようとの意図を潜ませていた。 【22/】 【参考：00951】



【01052】 福本<sup>ただゆき</sup>宰之 「ジョンソンの『ポープ伝』：出版文化をめぐる新たな詩人像」(Johnson's *Life of Pope*: A New Image of the Poet in Print Culture) 『十八世紀イギリス文学研究 第4号：交渉する文化と言語』 日本ジョンソン協会(編) 開拓社 2010年5月 pp. 159-176 & 401-402(synopsis). SJ前後のPope伝を読み比べることで, "Pope"でのSJの功績を抽出する. すなわち自らの書簡集を出版しようとPopeが画策した事実を暴露したこと, *Dunciad*で原稿の嵩上げを糾弾していた張本人が*Iliad*で同様の手段に出たと指摘したこと, Popeは政治的中立姿勢で*Iliad*の売り上げ増に繋がたと分析したこと, であった. 【22/】 【参考:00951】

【01071】 下楠昌哉(編) 『イギリス文化入門』 三修社 2010年7月 《385頁》. 「英語と英語圏について」と題した第2章の第5節(pp. 37-39)で*Dictionary*が英語の形態的安定に貢献したとし, 第4章「イギリスの歴史と文学」では「ジョンソン博士と新古典主義」(pp. 97-98)がSJ/JBを簡単に紹介.

【01091】 小林章夫(監修)/サウンディングズ英語英米文学会(編) 『サミュエル・ジョンソン：その多様な世界』 金星堂 2010年9月 《157頁》. 2009年10月3日に上智大学で催されたサウンディングズ英語英米文学会第60回大会におけるシンポジウムが発端となった論集で, 多面性に富むSJを包括的に紹介しようとする啓蒙書. 【参考:00922】

「まえがき」(小林章夫).....pp. 3-5.

「第1章:ジョンソンのジャーナリスト的側面」(藤井哲).....pp. 9-31.

SJが生活のために書き散らしてきた文章について, 発掘や本文確定の作業が手間取っている背景と今日までの成果. 【16/】 【25/】 【参考:006Y1】

「第2章:ジョンソンと近代小説:小説, ロマンズ, そして『女キホーテ』を手がかりに」(土井良子).....pp. 32-46.

SJの小説観とromance観を*Rambler*に読み出してから, Charlotte Lennoxの反romance的小説*The Female Quixote* (1752)との繋がりを注視する. また Hannah More, Fanny Burney, Jane Austenの文学に及ぼしたSJの影響にも触れる. 【10/1】 【5/2】 【5/3】

「第3章:フィクションとしての『スコットランド西方諸島の旅』:大英帝国と尚武の精神」(浦口理麻).....pp. 47-63.

商業化され豊かなEnglandから旅してきたSJは, Scotlandを活性化するために武装化した民兵を組織することを*Journey* (1775)において夢想したが, そ



れは自らの幸福を認識するために悲惨な境遇を見て回ったRasselasの歩みにも重なりと指摘。 【21/】 【18/】

「第4章:ジョンソンの政治学:愛国心と二大政党」(中島渉).....pp. 64-83.

【01012】を加筆・修正するに際して、私欲を容認し政治による統制を述べたBernard Mandevilleの*The Fable of the Bees* (1714)を援用する。 【20/】

「第5章:ジョンソン英文典における統語論の扱いとその先見性」(池田真).....pp. 84-93.

SJが*Dictionary*の前付に統語論として4規則しか挙げなかったのは、語法レベルの説明を*Dictionary*本体での記述に担わせることで、11行しかない統語論を補完できたからで、そこにはSJの先見性が認められるとする。 【17/】

「第6章:ささやかな修正規範主義宣言:ジョンソン『英語辞典』の珍妙な定義が示すもの」(下永裕基).....pp. 94-118.

*Dictionary*ちょう15例しかない珍妙な定義は、SJが辞書の権威を茶化するためのスパイスであり、それはSJの編纂方針が規範主義から煮え切らない規範主義(すなわち記述主義)へ傾いたことを、読者に向けて発信したメッセージであったと見る。 【17/】

「第7章:ジョンソンとシェイクスピア」(杉木良明).....pp. 119-132.

古典主義文学で三一致の法則を重んじる風潮にあって、そのロマン主義的なShakespeare解釈を試みたSJは、文学趣味を転換させる存在となった。 【19/】

「第8章:『イギリス詩人伝』:スコットランドとの戦い」(小林章夫)... pp. 133-143.

*Lives*成立の事情と瑕疵に触れてから、Londonの書籍商たちが完成を急いだ背景として、John Bell (1745-1831)がEdinburghで押し進めていた同趣旨の企画が驚異になっていたと解説する。なお本稿は、英米文学専攻課程協議会大会(2009年11月21日於上智大学)での講演に基づく由である。 【22/】

「索引」.....pp. 144-157.



## ■人名索引■

○漢字で表記し得る人名は苗字の五十音順，欧字によるものは Family name の ABC 順で配列した。

○本名，雅号，ペン・ネーム等を区別していない．また新・旧漢字が混用されている．

○人名の読み方については、Webcat Plus や J-Global に準じたり、音読みあるいは見当で済ませたりした。

○Johnson および Boswell 以外の人名を、英文学およびそれ以外の分野における人名、更に書名ちゅうの人名や書名のみ言及された時のその著者名なども含めて索引の対象にしたが、架空の人名は拾っていない。

## あ

青木剛.....【00741】

青柳正規.....【00631】

秋月新太郎.....【00835】

秋山徹夫.....【97342】

安達まみ.....【00741】

安西信一.....【007Y3】

## 61

池澤夏樹.....【007Z4】

池田真.....【009Z2】【01091】

石毛直道.....【00673】

石田憲次.....【93311】【93351】

【93431】 【95064】

石田直矢[なおや?].....【96143】

泉谷寛[ゆたか].....【99074】

伊丹レイ子.....【00721】

市川泰男.....【005X3】【00631】

【00791】 【00991】 【009Y1】 【01031】

稲村善二.....【00039】【00636】

【00791】 【00871】 【009Y1】 【01031】

井上治子.....【007Y3】

今井雅晴.....【00373】

岩田託子[よりこ].....【00741】

## う

上田敏.....【90092】【90121】

【90561】 【930X2】 【009Y2】

内多穀.....【95542】

内田魯庵.....【89443】

内山賢次.....【926X1】

浦口理麻.....【006Z3】【009Z2】【01091】

## え

江藤秀一[ひでいち].....【00373】【00621】

【00631】 【00632】 【00651】 【00653】

【00723】 【00751】 【00791】 【00822】

【00851】 【00861】 【00961】 【009Y1】

【01031】 【01032】

海老澤豊.....【00583】【00741】

圓月「えんげつ」勝博……【00681】【009Z1】

遠藤祐.....【99437】

お

及川賢.....【009Y1】  
大社淑子[おおこそよしこ].....【987Z5】  
大塚勝弘.....【01041】  
大槻文彦.....【00981】【009Y1】  
大西洋一.....【00951】  
大野舞子.....【01034】  
大森裕實[ゆうじつ].....【006Z2】  
【00833】【008Z2】【009Y1】  
岡倉覚三[天心].....【90653】  
岡倉由三郎.....【93461】  
岡本圭次郎.....【95641】  
小椋晴次[おぐらはるじ].....【93111】  
長田弘.....【00942】  
尾島庄太郎.....【96981】  
小野俊太郎.....【00741】

か

加賀屋俊二.....【005Y4】  
笠原順路[よりみち].....【00583】  
金田耕一.....【99924】  
上坪正徳.....【00981】  
川北稔.....【00673】  
川戸道昭.....【009Y2】

き

北村達三.....【98034】  
木下卓[たかし].....【00741】【00962】  
木原研三.....【967X1】  
木村正俊.....【006Y3】【00961】

く

草原昭喜.....【99952】  
工藤直太郎.....【95841】【96113】【99773】  
久野陽一.....【00681】  
倉俣トーマス旭.....【99911】  
黒川敬三.....【00962】  
黒部五郎.....【93142】  
桑島秀樹.....【007Y3】

こ

小池銑.....【984Z4】  
小泉朝子.....【00962】  
小出正吾.....【949Y3】  
紅野[こうの]敏郎.....【96571】【99773】  
小林章夫.....【00652】【00661】  
【00944】【009Z1】【01091】  
小林武夫.....【99911】

さ

齋藤晃.....【00911】

斎藤信平.....【00791】【009Y1】  
 齋藤勇[たけし].....【93351】【93352】  
 【95761】  
 佐伯彰一.....【00634】  
 榊原貴教.....【87171】【92121】【009Y2】  
 笹川浩.....【01033】  
 定松正.....【00993】  
 札木新一.....【928Y2】  
 佐野摩美.....【009Y1】

鈴木善三.....【00752】  
 鈴木三重吉.....【92121】  
 諏訪部仁.....【97411】【00631】【00761】  
 【00791】【00981】【009Y1】【01031】

## せ

仙葉豊.....【009Z1】

## し

塩野美奈.....【006X1】  
 芝垣茂.....【00631】【00692】【00734】  
 【00791】【00832】【00871】【00933】  
 【00991】【009Y1】【01031】  
 柴田錬三郎.....【96921】  
 渋谷章.....【009Y1】  
 島弘之.....【00283】  
 清水阿や.....【957Z2】  
 清水一嘉.....【00841】  
 下楠昌哉.....【01071】  
 下永裕基.....【01091】  
 朱牟田夏雄.....【95064】【96291】

## そ

添谷育志[そえややすゆき].....【99924】

## た

柴田錬三郎.....【96921】  
 渋谷章.....【009Y1】  
 島弘之.....【00283】  
 清水阿や.....【957Z2】  
 清水一嘉.....【00841】  
 下楠昌哉.....【01071】  
 下永裕基.....【01091】  
 朱牟田夏雄.....【95064】【96291】

平善介[ぜんすけ].....【00752】  
 高尾直知.....【00664】  
 高知尾[たかちお]仁.....【00691】  
 高橋安光.....【00836】  
 高柳俊一.....【95942】【977Z3】【98335】  
 武内信一.....【00941】  
 竹内佳子[よしこ].....【98325】  
 武田将明.....【009Z1】  
 多胡吉郎.....【00913】  
 巽孝之.....【009Y1】  
 田島松二.....【01035】  
 田中京子.....【99354】【007Z2】  
 谷口伊兵衛[勇].....【00372】

## す

末松信子.....【01035】  
 杉木良明.....【01091】  
 鈴木次郎.....【93431】

つ

塚野耕[たがやす].....【991X2】  
坪内逍遙.....【89081】【891Y3】  
鶴田学.....【00661】

中原章雄.....【009Y1】  
仲村明子.....【96672】  
中村敬.....【96143】  
中村賢一.....【00692】【009Y1】  
中村保男.....【959X8】  
夏目漱石[金之助].....【90931】【00981】  
浪野呉岸[なにのくれがし] → 岡倉由三郎  
成田成寿[しげひさ].....【969X3】

て

出来成訓[できしげくに].....【00661】  
【006Y2】  
出口保夫.....【97852】【98272】【00943】  
寺澤盾[じゅん].....【008X1】

に

西村孝次.....【96571】  
西山徹.....【00951】

と

土井良子.....【01091】  
常磐高子.....【000Z1】

の

野中邦子.....【00633】

な

中尾正史.....【006Y3】  
中川朗子[あきこ?] .....【00753】  
中川忠[ただし] .....【00671】【00932】  
中島渉.....【009Z2】【01012】【01091】  
永嶋大典[だいすけ].....【967X1】【96831】  
【99437】【00496】【009Y1】  
中野好夫.....【95064】  
中野好之.....【00942】

は

橋本修一.....【00912】  
八田重雄.....【99476】  
服部典之.....【006Y3】  
濱下昌宏.....【007Y3】  
早川勇[いさむ].....【99476】【00711】  
【00722】【00732】【00733】【00771】  
【007Y1】【00811】【01013】【01021】  
原田範行.....【00635】【00637】【00641】  
【00652】【00681】【00691】【006Z1】



【00731】【007Z3】【00831】【00861】  
 【00911】【00931】【00934】【00951】  
 【00971】【009Y1】【009Z1】【01011】  
 【01051】

## ほ

星川裕章.....【96921】  
 堀秀彦.....【95836】  
 堀口俊一.....【00276】

## ひ

樋口欣三[きんぞう].....【00741】  
 蛭川久康.....【00993】

## ま

松田修一.....【00724】  
 松田隆美[たかみ].....【00931】  
 松原慶子.....【97033】  
 松原正.....【96082】  
 丸谷才一.....【00881】【008Z1】

## ふ

風帯子 → 内田魯庵  
 福島治.....【01031】  
 福田恒存.....【959X8】  
 福留久大[ひさお].....【008Z1】  
 福原麟太郎.....【92881】  
 【92911】【95252】【954X3】【954Y1】  
 【957Z2】【960X4】【96794】【96981】  
 【97244】【99952】  
 福本宰之[ただゆき].....【00662】【00951】  
 【01052】  
 藤井哲.....【98715】【00661】【006Y1】  
 【006Y2】【009Y1】【01091】  
 藤岡勝二.....【009Y1】  
 藤本昌司[まさし].....【005Y4】  
 船戸英夫.....【99881】  
 古草秀子.....【006Z4】

## み

三國隆志.....【006Y3】  
 水田洋.....【009X1】  
 南出康世[みなみでこうせい].....【00497】  
 三原穂[みのる].....【00834】  
 宮下啓三.....【009Y1】  
 三好楠二郎.....【009Z2】

## む

向井秀忠.....【00935】【009Y1】  
 村岡博.....【90653】  
 村上至孝.....【96291】

も

本居宣長.....【97852】  
本吉侃[ただし].....【00665】【007Y1】  
森安幸夫.....【95861】

や

箭川[やがわ]修.....【00951】【009Y1】  
矢野峰人[ほうじん 禾積 かずみ].....  
【930X2】  
山田奨治[しょうじ].....【007Z1】  
矢本貞幹[ただよし].....【96031】

よ

横手長治[ちょうじ].....【009Y1】  
横山茂雄.....【00753】  
吉野由利.....【009Z1】  
吉村伸夫.....【007Y3】  
吉本良典[よしふみ].....【968Z2】  
米山優子.....【00961】  
依藤[よりふじ]道夫.....【007Y2】

り

柳村 → 上田敏

わ

渡邊孔二.....【009Z1】

A

Addison, Joseph .....【00932】  
Anne, Queen .....【965X1】【007Z2】  
Austen, Jane .....【01091】

B

Bailey, John .....【95064】  
Bailey, Nathan .....【93352】【005X3】  
【00733】  
Barber, Francis [Frank] .....【98325】  
【00981】【009Y1】  
Becket, Thomas .....【007Z1】  
Bell, John .....【01091】  
Blair, Hugh .....【009X1】  
Blunden, Edmund .....【96922】  
Bolingbroke, 1st Viscount [Henry St  
John] .....【01012】  
Bragg, Melvyn .....【00452】  
Bronte, Charlotte .....【007Y2】  
Bruce, James .....【00691】  
Bryant Mary .....【96672】  
Burnes, Julian .....【006Z4】  
Burney, Charles .....【009Y1】

Burney, Frances ..... 【00935】 【009Y1】  
 【01091】  
 Bush, Douglas ..... 【991X2】  
 Bute, 3rd Earl of [John Stuart] .....  
 ..... 【00664】

Donaldson, Alexander ..... 【007Z1】  
 Donne, John ..... 【97342】  
 du Halde, Le P. J. B. .... 【95942】 【977Z3】  
 Dryden, John ..... 【00671】 【00932】  
 ..... 【00951】 【009Z1】

## C

Carmichael, Poll..... 【009Y1】  
 Cave, Edward ..... 【00681】  
 Chalmers, Alexander ..... 【92881】  
 Chapman, Robert William ..... 【01031】  
 Chatterton, Thomas ..... 【00637】  
 Chaucer, Geoffrey ..... 【991X2】  
 Chesterfield, 4th Earl of [Stanhope, P.  
 D. ] ..... 【90121】 【01021】  
 Clingham, Greg ..... 【00992】  
 Coleridge, S. T. .... 【96031】  
 Cook, Judith ..... 【96672】  
 Cowley, Abraham ..... 【009Z1】  
 Cowper, William ..... 【97342】

## D

Danziger, Marlies ..... 【00821】 【00871】  
 DeMaria, Jr., Robert ... 【00496】 【00734】  
 ..... 【00832】 【00933】 【00992】  
 Denham, John ..... 【01033】  
 Desmoulins, Elizabeth ..... 【009Y1】  
 Dodsley, Robert ..... 【00681】 【01021】

## E

Eccles, Lady Mary → Mary Hyde  
 Edel, Leon ..... 【00634】

## F

F. N. .... 【96044】  
 Ferguson, Robert ..... 【00961】  
 Fleeman, John David ..... 【00981】  
 Frankl, Viktor Emil ..... 【009Y1】  
 Franklin, Benjamin ..... 【008Z1】  
 Frederick the Great, King of Prussia .....  
 ..... 【006Z1】

## G

Gale, Robert L. .... 【00664】  
 Gally, Tom ..... 【00891】  
 Garrick, David ..... 【89081】  
 ..... 【96143】  
 Gaskell, Elizabeth C. .... 【007Y2】  
 Gay, John ..... 【99773】

【00932】

Gibbon, Edward ..... 【92911】  
Goldsmith, Oliver ..... 【89081】 【926X1】  
【00664】 【007Y2】 【009Y1】  
Gordon, Richard ..... 【99911】  
Gray, Thomas ..... 【960X4】 【991X2】  
【00932】 【009Z1】

H

H → 堀秀彦

Hawkesworth, John ..... 【00637】 【009Z1】  
Hawkins, John ..... 【006Y2】 【009Y1】  
Hawthorne, Nathaniel ..... 【91341】  
【92121】 【949Y3】 【009Y1】  
Hemlow, Joyce ..... 【00935】  
Hill, George Birkbeck .... 【00636】 【00671】  
【00835】 【00932】 【009Z1】  
Hitchings, Henry ..... 【007Z2】 【008Z2】  
Hodge ..... 【99881】  
Hope, Annette ..... 【00633】  
Hume, David ..... 【99924】 【00981】  
Hyde, Mary ..... 【00496】

I

Ignatieff, Michael ..... 【99924】  
Ingpen, Roger ..... 【90121】

J

Jackson, Howard ..... 【00497】  
James, Henry ..... 【00634】  
Johnson, Michael ..... 【009Y1】  
Jones, J. B. .... 【008Z3】  
Juvenalis, Decimus Junius ..... 【926X1】  
【00637】 【009Y1】

K

Kolb, Gwin, J. .... 【00672】 【00771】  
※本体(2006)の「索引」では Kohler と誤記  
して立項した。

L

Lemprière, John ..... 【00038】  
Lennox, Charlotte ..... 【01091】  
Levet, Robert ..... 【009Y1】  
Lobo, Jerónimo..... 【969X3】  
Lonsdale, Roger ..... 【00662】 【00932】  
【009Z1】  
Love, Andrea ..... 【000Z1】  
Lynch, Jack ..... 【006Z2】  
Lynd, Robert ..... 【928Y2】

M

- M. N. .... 【965X1】 【00861】 【009Y1】
- MacDonald, Flora ..... 【00632】 【00861】
- Macleod, Malcolm ..... 【00632】 【00861】
- Macpherson, James .... 【00637】 【00834】
- Macy, John Albert ..... 【926X1】 【957Z2】
- Magill, Frank N. .... 【00753】
- Malory, Thomas ..... 【00941】
- Mandeville, Bernard ..... 【01091】
- Marx, Karl ..... 【008Z1】
- Maurois, André ..... 【00039】
- Mavor, William ..... 【00971】
- McDermott, Anne ..... 【006Z2】
- Milton, John ..... 【92911】 【00951】  
【009Z1】
- Milward, Peter ..... 【00912】
- Moir, John ..... 【00981】
- More, Hannah ..... 【01091】
- Murray, James A. H. .... 【90092】 【00941】
- Playfair, Wiliam Alfred ..... 【92911】
- Pope, Alexander ..... 【926X1】 【954Y1】  
【957Z2】 【96011】 【00951】 【009Z1】  
【01052】
- Porter, Roy ..... 【99354】
- Psalmazar, George ..... 【00981】

## R

- Reynolds, Joshua ..... 【009Y1】
- Rousseau, Jean-Jacques ..... 【00981】
- Rowe, Nicholas ..... 【96082】
- Rowlandson, Thomas ..... 【00373】
- Rubens, Peter ..... 【89081】
- Rymer, Thomas ..... 【96082】

## S

## N

- Norfolk, Lawrence ..... 【00038】

## P

- Peakman, Julie ..... 【006X1】
- Percy, Thomas ..... 【00834】
- Petrarch, Francesco ..... 【007Z2】
- Pickford, Stephanie ..... 【00751】
- Piozzi, Hester ..... 【00651】 【006Y2】

- Savage, Richard ..... 【007Z3】 【00981】  
【009Y1】 【009Z1】
- Shaftesbury, 3rd Earl of [Anthony Ashley  
Cooper] ..... 【00791】
- Shakespeare, William ..... 【95861】  
【959X8】 【96082】 【007Y3】 【00811】  
【00981】 【01091】
- Sheridan, Thomas ..... 【00665】
- Sledd, James H. .... 【00771】
- Smiles, Samuel ..... 【87171】
- Smith, Adam ..... 【009X1】



Spenser Edmund .....	【00811】	Webster, Noah .....	【99476】	【00665】
Steele, Richard .....	【930X2】		【00733】	【007Y1】
Stephen, Leslie.....	【95641】	West, Benjamin .....		【00664】
Stewart, Dugald .....	【008Z1】	Wilkes, John .....		【00835】
Strachey, Lytton .....	【00039】	Williams, Anna .....		【009Y1】
Stuart, Charles Edward .....	【00981】	Worcester, Joseph E. ....		【00665】
Swift, Jonathan .....	【005Y4】	Wordsworth, William .....		【97342】
	【009Y1】			【009Z1】



## T

Thrale, Henry ..... **【009Y1】**  
 Thrale, Hester → Hester Piozzi  
 T • M • T ..... **【93431】**  
 Todd, Henry J. .... **【92881】** **【00665】**  
 Tuchman, Barbara W. .... **【987Z5】**

## V

Voltaire [François-Marie Arouet] .....  
 .....【98335】【00836】

W

Wakelin, Martyn F. .... **【00372】**  
Walker, John ..... **【92881】**  
Wallach, Anne Tolstoi ..... **【98325】**  
**【00981】**  
Ward, Edward Matthew ..... **【90121】**

## ■主題別索引■

○以下は Johnson および Boswell に関連した主題別の索引である.

○James L. Clifford と Donald J. Greene が *Samuel Johnson: A Survey and Bibliography of Critical Studies* (Minneapolis: Univ. of Minnesota Pr., 1970) で提唱した【主題識別番号】を一部変更して援用している。

○各文献への主題の分類は、編著者の判断と印象によるもので、目安にはなろうが絶対的なものではない。

【1/1】: Johnson による作品の書誌

【1/2】:Johnson 研究の書誌.....  
.....【00661】【006Y2】【00831】【009Y1】

【1/3】:Johnson の蔵書および彼の愛  
書家の側面.....【93081】

【1/4】: Johnson 関連文献コレクション, 展示会目録

【2/】: Johnson による作品の刊本.

選集, 全集

【3/】: Johnson を取り上げた伝記,  
伝記的情報, 心理学・病理学的考察  
..... 【93461】【95064】【96044】  
【965X1】【00633】【007Z2】【009Y1】

【4/1】: *The Life of Johnson*  
(1791)およびBoswellとJohnsonと  
の交友..... 【95836】【96143】  
【00634】【00835】【00881】【00942】  
【00961】【00981】【009Y1】

【4/2】: *Life* 以外のBoswellによる  
作品..... 【00636】【00791】  
【00861】【00991】【009Y1】【01031】

【4/3】: “Boswell Papers” 等.....  
..... 【929X3】  
【93142】【96672】【99354】【99911】  
【99924】【000Z1】【006X1】【00821】  
【00836】【00871】【00981】【009X1】  
【009Y1】

【5/1】: Thrale 家とJohnson との関  
わり合い..... 【00861】【009Y1】

【5/2】: Burney 家とJohnson との  
関わり合い..... 【00935】【009Y1】  
【01091】

【5/3】: その他のJohnson 周辺の人

物たちと彼との関わり合い.....  
..... 【928Y2】【00681】【007Y2】

【007Z1】【00822】【00981】【009Y1】  
【01091】

【6/1】: Johnson 関連団体, 郷里や  
居住地, ゆかりの品々..... 【96882】  
【96922】【96981】【97852】【00496】  
【00663】【00672】【00692】【006Y1】  
【00734】【00751】【00752】【00791】  
【00821】【00832】【00871】【00933】  
【00981】【00991】【00992】【01011】  
【01041】

【9/】: Johnson をモデルにした虚構  
作品, パロディ, 引用句集.....  
..... 【91341】【92121】【949Y3】  
【98325】【00276】【009Z4】【00721】  
【007Z4】【008Z3】【00913】【009Y1】

【10/1】: 批評家としてのJohnson  
等の一般的研究..... 【92911】  
【96011】【991X2】【00834】【009Y1】  
【01091】

【10/2】: 伝記作家としてのJohnson  
等の批評的研究..... 【009Y1】

【10/3】: 談話家としてのJohnson  
..... 【95836】【009Y1】

【10/4】: Johnson と歴史上の人物と

- の比較.....【00664】【00981】
- 【10/5】: Johnson 当時および後世での彼の名声や人物評.....【926X1】  
【957Z2】【98715】【00283】【00934】
- 【11/】: 諸事項 (芸術, 教育, 青少年, 法律, 超自然事象, 風土, 科学, 戸外の娯楽, 女性, 結婚等) に対する Johnson の見解および姿勢...【95942】  
【96113】【977Z3】【98272】【99354】  
【99773】【00652】【00931】【00981】  
【009Y1】
- 【11/9】: Johnson の思想.....【00981】
- 【11/10】: Johnson の気質と習癖  
.....【90653】【00633】  
【00637】【00761】【00981】【00981】
- 【12/】: Johnson の散文文体
- 【13/】: *The Life of Richard Savage* (1744) および初期の伝記類.....  
....【006Z1】【007Z3】【00981】【009Y1】
- 【14/】: *London* (1738), *The Vanity of Human Wishes* (1749), および劇場関連著作を除く韻文作品.....【95542】【009Y1】
- 【15/】: *Irene* (1749) 等の劇場関連
- 著作.....【00635】【009Y1】
- 【16/】: *The Rambler* (1750-52), *The Adventurer* (1752-54), *The Idler* (1758-60) 等の随筆.....  
.....【968Z2】【009Y1】【01091】
- 【17/】: *A Dictionary of the English Language* (1755) および Johnson の言語学者としての側面.....  
.....【90092】【90121】【92881】  
【93352】【954X3】【96571】【96794】  
【96921】【98034】【99476】【00372】  
【00497】【005X3】【00641】【00665】  
【006Z2】【00711】【00722】【00724】  
【00732】【00733】【00771】【007Y1】  
【007Z2】【00811】【00833】【008X1】  
【008Z2】【00912】【00941】【00962】  
【00981】【009Y1】【009Z2】【01013】  
【01021】【01034】【01035】【01091】
- 【18/】: *Rasselas* (1759) 等の散文虚構作品.....【98335】【00691】  
【00692】【006Z3】【00753】【007Y2】  
【00911】【009Y1】【009Y2】【01091】
- 【19/】: *The Plays of William Shakespeare* (1765) の編纂および批評.....【95861】  
【959X8】【96082】【00981】【01091】
- 【20/】: 政治・経済関連の著述およ

び見解.....【00731】【00981】  
【009Y1】【009Y1】【009Z2】【01012】  
【01032】【01091】

【21/】: *A Journey to the Western  
Islands of Scotland* (1775)など旅行  
関連全般.....【97411】【00621】  
【00632】【00651】【00653】【00723】  
【00851】【00861】【00971】【00981】  
【00993】【009Y1】【009Z2】【01091】

【22/】: *The Lives of the English  
Poets* (1779-81).....【960X4】  
【97033】【00039】【005Y4】【00662】  
【00671】【00932】【00951】【009Z1】  
【01033】【01051】【01052】【01091】

【23/】: Johnson の書簡

【24/】: Johnson の日記, 祈祷, 説  
教類および信仰関連.....  
.....【99437】【00981】

【25/】: その他の Johnson による作  
品.....【00691】【01091】

\*\*\*\*\*

## ■ 累積正誤表 ■

(2010年9月現在)

\*\*\*\*\*

【00661】『日本におけるサミュエル・ジョンソンおよび ジェイムズ・ボズウェル文献目録(1871-2005)』(ナグ出版センター, 2006)

### のための累積正誤表

p. vii (11行目): しかし → また

同 (最下行): 標題紙の → 標題紙での

p. xvii (下から5行目): 柴垣→芝垣

【87171】(8行目): オン・ライン → オンライン

【91051】(2行目): p. 264 → pp. 263-264

【916Y1】(1 & 2行目): 蘓峯 → 蘇峯

【93311】(下から12行目): 觀察 → 觀察

【93421】(1行目): 英文學新 → 英文學新講

【95412】(1行目): 鈍重の弁 → 鈍重の辨

【955X1】(3行目): \*『辞書』 → 『辭書』

【95621】(2行目): Postage → Postgate

【95923】(1行目): 日英社 → 日栄社

【95932】(2行目): なか → のなか

【96981】(28行目): \* を削除

【97432】(8行目): 4月～ → 4, 8月

【96141】(7行目): 追加【初出: 96031】

【98111】(1行目): 英文学と名随筆と →

英文学研究と名随筆を残し

【98121】(4行目): 昨年 → 昨年 [1978]

【98313】(2行目): 対象性 → 対照性

【98372】(2行目): 隨所 → 隨所

【98391】(7～8行目): 編者Ellery…評した  
を5行目の冒頭に移動

【98731】(3行目): *Rassela* → *Rasselas*

【98844】: この項目削除

【98933】(5行目): infantism → infantilism

【989X2】(1行目): ; → :

【99081】(3行目): 376日 → 383日

【99351】(5行目): 触れなて → 触れて

【99522】(4行目): 【25/】 → 【20/】

【99981】(2行目): 兄John Fielding (?-1780)  
→ 弟John Fielding (1721-1780)

【00321】(3行目): 【13/】 【14/】 【15/】  
【18/】 【19/】 を削除

【00381】(1行目): シャーロツク →

シャーロック

【003X1】(5行目): 縮少 → 縮小

【00584】(5行目): 【11/1】 → 【11/】

p. 276 (石橋幸太郎): 【953&1】→【95342】

p. 278 (小野寺健): 【96253】→【99253】

p. 281 (坂本和男): この項削除

p. 282 (「す」): 須原屋茂兵衛……………  
……… 【87171】 を追加

p. 284 (「と」): 蘓峯 → 蘇峯

p. 292 (Chambers, Robert):

【00392】 を同姓同名の新項目に

p. 294 (F.[H.] R.):

福原麟太郎 → 富原[ふはら]芳彰

同 (Fleeman, John David): 【99738】およ  
び【00536】をFielding, Henryに移動

p. 295 (Hawkins, John): 【983Z1】追加

同 (Hawthorne, Nathaniel): 【98844】削除

p. 296 (Kohler, C. C.): → Kolb, Gwin J.

同 (Jonson, Ben): 【96176】→【96163】

p. 299 (Postage): → Postgate



p. 300 (Rousseau, Jean J.) :  
→ Rousseau, Jean-Jacques  
p. 303 (Woolf, Virginia) :  
【99472】 【99472】 → 【99472】 【99473】  
同 (Wallis, John) : 【98651】 追加  
p. 306 ( 【9/1】 ) : 【98844】 削除  
p. 308 ( 【18】 ) : 【88621】 → 【88622】  
【88831】 → 【88931】  
p. 310 ( 【25/】 ) : 【99522】 を 【20/】 へ

\*\*\*\*\*

【006Y2】 「日本における Samuel  
Johnson研究の流れ：附：Mrs Piozzi  
(Thrale) の場合， Hawkins の場合，  
Boswellの場合」(2006)

のための累積正誤表

p. 6 (本文の下から6行目) :  
(1974) → (1973)  
同 (下から4行目) :  
Johnson → Johnsonの改訂版  
p. 7 (13行目) : あり分 → あり  
p. 8 (下から3行目) : 。 → .  
p. 13 (9行目) :  
Wain (1974) → Wain (1974; 1975)  
同 (19行目) : 材量 → 材料  
p. 15注 (3行目) : Life → Life  
p. 19 (1行目) : 治療士 → 治療師  
同 (6行目) : 報道 → 報道【91191】  
p. 20 脚注 : \* 【91341】 から \* を削除  
【98844】 を削除

p. 24 (18行目) : 1987 → 1997  
p. 26 (4行目) : 益田 → 増田  
同 (12行目) : のwisdom →  
のwisdom 【95621】  
p. 29 (7行目) : 香り → 香りを  
p. 45 (11行目) : Tomerken → Tomarken  
p. 46 (4行目) : 始めて → 初めて  
同 (下から1行目) : 翌々 → 翌々年  
p. 50 (8行目) : 読んで → を読んで  
同 (13行目) : でにおいて → において  
p. 57 (下から6行目) : “ECCB for 1928” →  
“ECCB for 1927”  
p. 62 (6行目) : され → される  
p. 69 (14行目) : “Mitton” → “Milton”  
p. 72 (7行目) : 味合える → 味わえる  
p. 77 (18行目) : 一郎 → 二郎  
p. 78 (2行目) : LL.D. → LL.D.  
p. 82 (下から3行目) : Balderstone →  
Balderston  
p. 85 (9行目) : (1780) → (1786)  
p. 87 (5行目) : 加筆 → 加筆の  
p. 88 (1行目) : Thomas Seccombe →  
Thomas Seccombe  
同 (16行目) : 同志 → 同士  
p. 91 (6行目) : 第2版 → 初版  
p. 94 (7行目) : 岸川 → 岸本  
p. 95 (下から13行目) : [ECCB] → [ECCB]

\*\*\*\*\* 以 上 \*\*\*\*\*

